魔王な嫁が世界を滅ぼす三秒前

織葉 黎旺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結婚というのは人生の墓場だという。なるほど、確かにその通りだ。共感できる。何せ、偉大すぎる嫁をもらったせいで、誇張なしに私の人生は終わったのだから。機嫌を損ねたりなんかした日には、世界を巻き添えに文字通り墓まで一直線である。骨が残るかすら怪しいが……しかし嫁にも負けず姑（？）にも負けず、今日も慎ましやかに生きていく。

目次

料理が冷める一秒前 1
痺れを切らす二秒前 8
お風呂でのぼせた三秒前 14
快適に目覚めた四十分後 18
お昼ごはんの二時間前 21
喧嘩が始まる三分十秒前 24
来客を迎える一分半前 29
文句を言われる四秒前 32
絶叫の聞こえる五分前 36
思い返すのは数年前 38
喧騒へ向かう三十分前 42
到着の一時間前 44
魚を眺める十二分前 47
変化を感じる一分前 52
再会と謁見の十三分前 55
無礼と謝礼の三分前 60
約束の半年後と埋め合わせの三分前 64
朝食とからかいの五秒前 68
帰宅と観察の二分前 71
報告と邂逅の三秒前 73
幸福と決裂の一秒前 76
開戦の一秒前 79
決着の三分後 82
共感の七分前、傍観の二年後 84

相談と商談の二分前 88
拒否と対話の八分前 90
正体判明の一分前 96
取引と視察の三分前 101
見物と依頼の四分前 106
休息の三分前 110
鑑賞と感傷の三十一分前 112

料理が冷める一秒前

芳しい香草の匂いが鼻腔を突いた。一口大に切られた雷闘牛の脛肉をスプーンに乗せ、良く煮込まれたスープと合わせて口に含む。
「……うん、旨い」
私の言葉を受けて、銀のツインテールを揺らし不安そうにオロオロしてた彼女の表情がぱあっ、と明るくなった。お世辞なしで普通に美味しい。闘技場などでよく見かける雷闘牛、凶暴で強力な魔物であるが故に市場に出回ることは少ないが、味自体は絶品である。ただ、このシチューに使われている脛肉は硬く、調理の難しい部位なのだが――よく煮込まれているお陰か、多少歯応えがある程度で十分に噛み砕けるレベルだ。今朝畑で取れたばかりの、新鮮な香草の香りがアクセントに良い。百点とは言えないが、九十点くらいはあげられる。ほぼ文句無しに合格である。
「まあ私が作ったのですから、美味しいのも当然ですわ」
「昔は『料理なんて食材を切って焼いていればいいのでしょう？』なんていって料理とはいえないブツを作り上げてた人がよく言いますね」
「えへへへ」
「切って焼いとけばいい、っていうのはよく聞く典型的な料理下手の思考ですけど、まさか切って焼いた後に再びそれを煮て、更に蒸して、締めにレンジでチンするなんて愚行に走る人初めて見ましたよ」
「えへへへ」
特徴的である、山羊のようなぐるぐると渦をまく立派な角を掻き、照れていらっしゃるご様子のルシファル。冒頭は褒めてたけど後半は別に褒めてないです。
「花嫁修業するー、なんて言い出した時は別にそんなことしなくていいのにと思ったものですが、随分成長しましたよね」
「家事を貴方に任せっきりにするのは申し訳ないと思ったのよ」
「私はそれでも構わなかったんですけどねえ」
元々の向上心の高さ故か、上達はとても早かった。一部の家事に関

しては私なんかよりも全然上手いが、料理好きとしてこれだけは譲れない。しかしまあ、魔物の調理なんてここに来るまでほとんどやったことなかったから私も手探りだが――

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした～」

満腹満腹。楽しそうに食器を片付け始めたルシファルを微笑ましく見守りながら、食後のコーヒーを楽しむ。一息ついたところで机の上に置いてあった夕刊に手を伸ばし、ペラペラと記事を捲る。今日に限っては毎日楽しみにしている四コマ漫画も連載しておらず、どのページも似たような話題が多かったので、渋々見出し記事を読む。

『人魔戦争終結一周年記念式典をマクロニアで開催』……ねえ」

――古代より、人間と魔族は争い続けていた。争いの火種が何であったのか、それは永い永い時の間に忘れ去られてしまっていたが、お互いの間には遠い先祖から続く恨み辛み憎しみだけが残っていた。――しかし一年前。唐突にその戦争は終結することとなった。魔族側のトップである魔王の謝罪と、和解の提案によって。最初は誰もがその発言を疑い、やれ偽りの謝罪で人間を騙すつもりだの魔王が臆病風に吹かれて軟弱な思考に囚われてるだの散々な言われようだったが、人間側の王が歴代最高といえるほど穏健派だったこともあり、和解は唐突に行われた。とはいえ、つい昨日まで戦争しあっていたような状態だ。未だに両者の間には諍いが多いが、いつまでも過去に囚われていてはいけない、という自由な派閥が、お互いの文化や技術を伝えあっている。そしてその最たる場所がお互いの領土の中間に出来た都市、マクロニアなのだ。

「しかしその式典に魔王が出向かないのはよろしくないのでは……？」

戦争の終結を祝う行事なのだから、両者のトップが出向くのは当然だろう。しかし魔王は不遜にも、この式典をドタキャンしたらしい。胸の痛みがどうとか、病がどうとか子供が遅刻の言い訳で使いそうな嘘臭い駄々をこねて行かなかった、と書かれている。――まああながち、病というのは間違っていないのかもしれない。

「ルシファルさん」
　耳元の髪をくるくると指で弄びながら、構ってほしそうにそわそわと時折こちらを見つめていることに気づき、いい加減声をかけてあげた。
「ダメですわ、ちゃんと私のことは呼び捨てで呼んで」
「……ルシファルさん、寒くないんですか？」
「むう。別に寒くはないですが、少々スースーしますね」
　呼び捨てしない、というのは私の中の最後のささやかな抵抗である。くるりとその場で一回転するルシファル。丈の合わない少し小さなエプロンを着ているせいか、紐が肩から外れかけていて大変危ない。というか、どうして下着も何も着ていないんだ。裸エプロンなんて邪な文化誰に聞いたのだろう。
「ジンが男性にはこういう格好が効果的だ、というので。……お気に召さなかったかしら？」
「いえ、嫌いじゃないですよ」
「好きでは……ないんですか？」
　エプロンの隙間から豊満な胸の谷間が覗いて、思わず目を逸らした。
「好きです好きです大好きです」
「……ほ、本当に？」
「ええ。本当に。ルシファルさんって何を着ても似合いますよね」
「ふふっ、そういってもらえると嬉しいわ。でも――貴方には、一糸まとわぬ姿をお見せしてもいいのよ？」
　誘っているような上目遣い。ゆっくりと、私と彼女の距離が近づく。
「……いえ、まだそういうのはちょっと」
「貴方がそう仰るなら我慢するけど……もう夫婦だし遠慮することはないのでは？」
「前にも言いましたが、しっかり責任を取れるようになるまでは、駄目だと思うんです」
「でも私たちは――」

とんとん、と。扉をノックする音が聞こえた。背筋に悪寒が走る。冷房でも点けたみたいに、部屋の温度が下がったのを感じた。
「はい」
怖いくらいに微笑みだけは崩さず、ルシファルはゆっくりと扉に向かった。
「で、私たちの大切な時間を奪うに値する用件とは何かしら？」
やってきたのは国の官僚数名だった。真ん中に立った一人が震える声で、細々と話し始める。
「あの、魔王様。自国の今月の作物の収穫状況、経済状況、様々な諸問題について拝見していただきたく……」
「……はあ」
小さな溜息一つ。それだけで、彼女を正面に見据えた官僚達は、顔を青くして縮こまっている。
「そういう面倒なことは全て貴方達に任せると言ったでしょう？」
「しかし魔王様……！」
「五月蝿い」
くい、と軽く手を払う仕草。それが発動のトリガーとなり、真ん中にいた官僚がドゴッ、と明らかに無事では済まなさそうな音を立てて壁に激突した。戦いを想定して相当丈夫な筈の魔王城の壁に、大きなヒビが入る。
「私一人いないところで支障なんてないだろう？　私がしていた仕事なんてその気になれば誰にでも出来る作業だぞ？」
「魔王様なしじゃとても荒くれ者だらけの魔族を纏めあげていくことなど出来ませんっす！どうか！そこをどうかご容赦ください魔王様ぁぁぁ!!」
「……」
端の方にいた一番若そうな小物っぽい青年が、彼らの総意を伝える。魔王に対しての彼の勇気は買う。しかし、その堂々とした態度は、今の状況だと一周回って逆効果だ。
「わかった」
「ま、魔王様！」

魔王は小さく頷いた。官僚たちは顔を見合わせて喜んでいるが、すぐにその笑顔は壊されることとなる。
「要はこの国が丸ごとなくなれば、それで問題ないのね？」
すー、と息を吸った魔王は小さく詠唱を始めた。
「……は……？」
喩えるなら何だろうか――そう、仕事をしたくないから、会社を倒産させるという表現が一番近い。『自らやめるのも面倒だから』と、そうならざるを得ない状況を作ろうとしている。
沈黙が場を包んだ。理解できない、という気持ちが見て取れる。魔王のことを理解している側近たちが残っていればそもそもこんな状況には陥らなかっただろうし、何から何に至るまで彼女の落ち度であるのだが――それを有耶無耶にして、ぶち壊せるからこその――魔王。
「薙げ疾風、突き砕け突風。千の刃となりて、我に仇なす命を刈り取れ――」
体から漏れ出んとする魔力が渦を巻き、まだ発動に至ってもいないのに部屋の中の物を手当り次第吹き飛ばす。壁に叩きつけられた食器は割れ、数名の官僚も先程の仲間を追うように背後の壁に吹き飛んだ。運良く魔力障壁を展開出来た様子の青年は、呆然と魔王を見つめていた。
無論、最上級の魔法に一介の魔力障壁など意味をなさない。恐らく硝子のように簡単に砕け散る。彼は果たして今、何を考えているのだろう。暴君への恨みだろうか。やり残していることへの後悔だろうか。走馬灯でも見えているのかもしれない。そもそも、何故こんなことになっているのか、現状に理解が追いついているのか――
「――はあ」
面倒なことになったな、と小さく嘆息。思考を切り替え、すぐさま体を動かす。風に負けずに一直線、詠唱を完成させる前の彼女に勢いよく抱きついた。
「暴覇――って、え？・ええ？・ええええええええええっ!!??」

先程までの威圧感は何処へやら。渦を巻いていた魔力は何故か逆回転を始め、辛うじてそこら辺に残っていた新聞紙などが吹き飛び、さりげなく官僚たちに追撃が加わった。

自分からは積極的な割に、相手から来られると弱いタイプであることは知っている。いつもの彼女なら照れつつも喜んでいたはずだが、あまりにも突然だったおかげか、あたふたと振り払われた。

「急になんですのっ!?」

「怒ってるときは冷静な判断がしづらいものなので、落ち着かせてあげようと思いまして」

「む、むしろ逆効果よ！」

「で、落ち着けました？」

「……その、もう一回ぎゅってしてくれると……落ち着けるかもしれないわ」

「はいはい」

優しく抱き締めると、恐る恐るといった様子でこちらの腰に手を回してくるルシファル。女性の体温は男性のそれよりも高いと聞くが、熱でもあるんじゃないかってくらい温かい。大変格好悪いことに身長で大きく負けてしまっているので表情を伺うことは出来ないが、恐らく相当赤面しておられるのだろう。

「……落ち着いた？」

「落ち着いたわ」

「それなら離れない？」

「もう二度と離れない」

「……それだと、あんなことやこんなことは出来ませんよ？」

耳元で囁くと、ぴくっ、と小さく可愛い反応が見れた。

「あんなことやこんなこと……とは？」

「そうですねえ……遊園地デートだとか、水族館デートだとか、映画鑑賞だとか……色々ありますねえ。一度離れてくれないとそれらをするのは大変難しいですねえ」

「むむむむむ……」

渋々、唇を尖らせながら離れていくルシファル。ちょろい。可愛

い。
「じゃあ、今から遊園地デートに赴きましょうかっ！」
「駄目です。その前にお仕事しましょうお仕事」
「ええー……はっ、まさか。まさか本当は私とデートなんかしたくなかったりするのでは……？」
　小動物のような潤んだ瞳で上目遣い。あざとい。半端なくあざとい。
「違いますよ。無論、私だってルシファルさんと遊びたいです。でも多少の嫌なことがあるからこそ、そういった時間がより輝くのだと私は思いますよ」
「……だとしても、私は遊んでる時間だけで結構で」
「確かお仕事の中にテーマパークなどの建設がありましたね。あー、好きな人の設計した場所で一緒にデートできたら素敵だろうなー。こんなの自分の相手が偉大な人じゃないと味わえない体験だしなー」
「貴方達、さっさと私に仕事を回しなさい」
「はっ！魔王様！」
　勢いよく敬礼をした官僚達は、資料を抱えて魔王の元へ走った。数名はこちらにやってきて、何度もお辞儀と礼の言葉を繰り返した。いや、そんなに感謝されても困るから。大したことしてないから。
「あ、あの……ッ！」
　声の方へ振り返ると、先ほどの青年がこちらを見つめて立っていた。
「助けて頂いてありがとうございました！あなたは一体……？」
　貴様、なんと恐れ多いことを……ッ！なんて言って迫ろうとする官僚を諌めて、回答を考える。
「何者かって言われると難しいな……敢えて言うなら、そうだね、ただの人間だよ。魔王の夫ってだけでね」
　二重の厄介祓いが出来たし、庭で本でも読むか……彼女に気づかれないように、とぼとぼ歩き出した。

痺れを切らす二秒前

魔王（というか主に私）のこだわりにより、この城の庭園は一流の庭師により綺麗に整えられていて、四季折々の花が楽しめるようになっている。数本の薔薇のアーチを潜ると、バーベキューも楽しめるパーティスペースに出た。そこを通り過ぎると私用に作ってもらった小さなテーブルと椅子がある。

昼過ぎの庭園には暑い夏には心地良い冷たい風が流れており、快適に読書に没頭出来る。切り株で出来た木の温かみの伝わる椅子に座り、木の良い匂いが薫る大きなテーブルに本を置く。時間も忘れて本を読み耽っているこの時間に平穏と、平和の尊さを感じるのだ。のどかな暮らしバンザイ。正直、あってないような今の立場と嫁の仕事さえなければ、田舎に移住してのんびり農家でも営みたいくらいだ。いや、嫁のスペック的に農家なんかしなくても食っていけそうだけれど。

「――ふう」

そんな下らないことを考えたり考えなかったりしながら数時間。前から少しずつ読んでいたこともあり、分厚い本であったが読了した。いつの間にか空も橙色を帯びてきており、すぐに暗くなりそうだ。そろそろ私の姿が見えないことに嫁がしびれを切らしてそうだし、丁度いいタイミングだろう。

本を抱えて歩き出すと、向かい側から青年が歩いてくるのが見えた。

「あっ、魔夫様――！」

「君はさっきの……？」

喩えるなら小動物だろうか。人懐っこい笑顔でやってきたのは先ほど嫁に殺されかけていた青年。七三分けの蒼髪が印象的である。先程が初対面なはずだが、ぶんぶんと手を振りこちらに走り出した。

「俺、グレラ・アーツパラスって言うっす！先程は助けていただきどうもでしたっ！」

「いやあ、別に大したことはしてないさ……頭上げなよ。っていう

か大丈夫……？」
グレラは半端ない勢いで頭を下げ、そのまま後ろ足で地面を蹴りあげ土の中にダイブした。綺麗に垂直に突き刺さっているが本当に大丈夫だろうか。色々と。
「ぷはっ……ふう、やっぱりここの土は美味しいっすね」
「え、今の土食ってたの⁉」
もぐもぐと口の中に含んだ土を咀嚼して、彼はにんまりと幸せそうに踵を返す。
「美味かったあ……さて、昼寝昼寝ーっと」
「もう夕方だけどなあ……」
「はっ、そういえば魔夫様に用事があってきたんだった！」
あっちを見たりこっちを見たりと忙しい青年である。どうにも掴めない男だな、と苦笑する。嫌いじゃないよそういう人。
……しかし、あの”魔夫様”という呼び名はどうにかならないものか。魔王の夫だから魔夫様。字面は悪くないような気がしなくもないが、『まおさま』と発音する為どことなく締まらなくて間抜けに聞こえるし、魔王様に比べて魔夫様は数十倍カッコよくない。
「先程は助けていただきどうもでした！」
「それさっき言ってたよね？」
「間違えたっす！魔王様が呼んでましたよ？『旦那！私の旦那は何処!!!』って」
「それを早く言えよおおおおおお!!!」
愛しの嫁を待たせるわけにはいかないのだ。どんな被害が出るかわかったもんじゃない。不思議そうに首をかしげグレラを尻目に城へと一直線に駆け出した。

「ごめんお待たせ!!」
息を切らしながらも何とか三分ほどで部屋まで辿り着く。もしや自己新記録じゃないだろうか。頑張ったぞ、頑張ったぞ私。ルシファルは頬杖をつき退屈そうに虚空を見つめていたが、私の存在に気づくとぱあっと途端に明るい表情になった。

「お帰りなさいあなた♡ご飯にする？　ご飯にする？　それともわ・た・し？」
「一周回って新しいパターンですね」
「ちなみにオススメはお風呂ですわ」
「今の選択肢になかったのに!?」
大して汗をかいているわけではないが、湯船に浸かってのんびりするのは好きなのでそれを選ぶことにする。――しかし、果たして本当にのんびり出来るのか……
「ちなみに大きい方と小さい方、どちらで？」
「……小さい方で」
「はーい、今から準備するので少し待っててね」
「……あの、ルシファルさん」
「どうしました？」
「本当に、入らないとダメですか？」
「ダメです。週に一度は一緒にお風呂に入る、って約束でしょう？」
昔から、私が風呂に入る度に彼女はその中に乗り込んできた。男湯だろうが構わず入ってくるものだから、前は『そういうのは結婚した男女じゃなければいけなくてですね……』なんて出鱈目を言って誤魔化していたのだが、結婚してしまった現在、その言い訳は通じなくなってしまった。しかし本来、風呂は一人でのんびりと疲れを癒し汚れを流すべき場である。それにそういったイベントは、頻繁にやらないからこそ楽しいのだ、とこれまた口から出任せで説得した結果、週に一度だけ入る約束になった。なってしまった。
「それじゃあ準備してきますね」
「はーい……」
観念して三分ほど待つと、浴室の方からシャワーの音が聞こえてきた。それと同時に「どうぞー」というくぐもった声が聞こえた。ある程度服を脱いで、ゴクリ、と生唾を飲み込み浴室に入る。
「ふふふ……」
プールサイドに置いてありそうな白い椅子に寄り掛かり、足を組んで彼女は待っていた。腰までかかる長い銀髪はゴムでポニーテール

に纏められ、身に纏う黒いビキニが、きめ細やかな白い肌とのコントラストでより輝いて見える。
「それにしても、男女が風呂に共に入るというのにお互い水着というのは、なかなかに奇怪な図ではなくて？」
「健全な浴場の安全な混浴の場合、基本的には水着などで入るはずですし……まあ普通ですよこれくらい！　ええ!!」
「ふうん……？」
にい、と何かを企むような三日月が顔に浮かんだ。「さあ、早くお座りになって？」と彼女の目の前の椅子に勧められ、少し不穏なものを感じつつも、促されるままにそこに座った。とりあえず体を流しておこうと、目の前の蛇口を捻って温いシャワーを浴びる。
「ねえ、あなた？」
「はい……？」
ニコニコと子供のように無邪気で、さながら天使のような慈愛すら感じさせる綺麗な笑顔。私は知っている。この人がこういう笑顔を浮かべる時、大抵私にとってあまりよくないことが起こると。
「お背中お流ししますわ」
「えー……」
「嫌…ですか…？」
「いやー、嫌じゃないけど……」
嫌じゃないけど、だいたいこの後の展開が読めるから了承したくないのだ。あまり駄々をこねても意味はないので、大人しく受け入れるが。
「それではちょっと失礼するわね……んっ」
「んんっ!?」
予想通りというかなんというか、背中には人肌の柔らかい感触があった。ごしごしと上下に動きつつ、強くその存在感を私の脳髄へと主張してくる。
「んぅ、はぁ……ん……っ！」
石鹸が泡立つ音に混じり、微かに艶やかな声が聞こえる。……いや、聞こえない。何も聞こえない。石鹸はよく泡立っている。高く

て上質な物を使っているんだな、と思った。
「ふ、ぁ……！ゃ、おっき……あん……っ！」
「すいませーん!!別に流さなくていいですから!!自分で出来ますからー!!!!!」
少し固い突起のようなものが触れた気がした。煩悩をかき消すように大声で叫んだ。
「えー、折角頑張ってたのにぃ……でも大変だったのは確かだし、貴方が望まないなら諦めるわ」
「それはどうも……って、んん……？」
何か違和感を感じて振り返ると、ルシファルさんの手に泡を帯びた、奇怪な形の物が握られていた。
「……あの、それは？」
「面白い形よね、ジンが背中を流してあげるならこれが一番ー、っていうから使ってみたのだけれど、洗いにくいし不良品ですわね。後で百二十回くらい殺してきましょう」
百二十回とは言わないが、十回くらいは殺してほしかった。ルシファルさんがブンブンと振り回すソレは、持ち手の先に二つの大きな山のような、そんな物のついた肌色の訳の分からない代物で。二つの山の中心に一つずつ、赤い魔石のようなものが埋め込まれていて。赤の魔石は魔力を流しておけば熱を発し、周りのものを魔力量に応じるだけ温める。
…何故そこまで、と言える程の無駄に凝った悪戯だなあ……！
「ルシファルさん、ジンの野郎をリストラ出来ませんか？」
「リストラしたいのは山々なのだけれどね、そうすると今よりも更にめんどくさいことになるでしょうから……」
「あー……」
奴ならリストラされれば、むしろ喜んで自由にルシファルさんを追い回すだろう。そんなくだらない事に一々構っていられないので、残念ながら放置するしかなさそうだ。
「とりあえず頭を洗わせて頂きますわ」
「……お願いします」

何だかんだ言いつつも、彼女に身を任せての洗髪はとてつもなく気持ちいいのだ。そのまま暫しの、寝てしまいそうなほどの安心感と幸福感を楽しんだ。

お風呂でのぼせた三秒前

「やっぱりお風呂は良い文化ですわ」
「ですね」
そこそこ広い脱衣所で二人、扇風機の風に当たりながら過ごす。彼女は風呂の熱で赤くなった様子の頬ではにかみ、対して別の要素で赤くなった私が微笑む。まだ多少湿っている髪の毛を、わしゃわしゃとタオルで拭いていると、彼女が後ろからギュッと抱き着いてきた。
「ふふ、小さい背中……」
「やめて、気にしてるんだからやめて！」
「可愛らしくていいじゃない」
小柄なせいで、男らしい立派な体格とは言えないマイボディ。彼女に抱き着かれると本当に、包み込まれるような構図になる。
「すーはーすーはー……」
「ちょ、恥ずかしいから嗅がないでください！」
「石鹸の匂いがしますわ」
「そりゃそうでしょうね」
このままいるのも割と悪くはなかったが、晩餐の準備もあるので、くっついてくるルシファルさんをどうにか引きはがし（引きはがす過程で変なところに触ってしまったが不可抗力だ）、リビングの方に向かう。
「んんー」
夜ご飯は食べていないが、あまりお腹が空いているわけでもない。ルシファルさんはどうなのか気になったが、恐らくというか確実に、「貴方はどうなの？」って返されて答えた方に合わせてくると思う。うーん、あっさりした軽いものでも作るか。
「冷蔵庫って今、何入ってましたっけ？」
「野菜各種と肉各種、果物数種類に氷菓子じゃなかったかしら」
「わあ不自由なく揃い踏み」
ぐぬぬ、それだけ多いと逆に迷ってしまう。うーん、何を作ろうものか……

「私はそこまでお腹空いてませんし、夜ご飯は遠慮させていただきますわ」
「じゃあアイスでも食べません？」
季節は初夏。若干暑い今夜にアイスは丁度いい。冷蔵庫からソーダ味のボリボリ君とオレンジ味のボリボリ君を出して、一本を黒いソファに座り込んだルシファルさんに投げた。
「確かルシファルさんソーダ味が好きでしたよね？」
「覚えててくれたんですか……！」
ルシファルさんは目をキラキラ輝かせてこちらを見る。いや、好きなアイスの味を覚えてた程度でそんなに嬉しそうな顔されてもこっちが困ってしまう。
「うん、美味しっ♪」
「（安物だけどいいのか……？）」
ラーゲンダッツなどの高級アイスもあったのだが、何故かこちらの魔王様は安物の方に心が躍るらしい。不思議である。でも育ちのいい人程ジャンクフードとかを美味しく食べると聞くし、そういうものなのかもしれない。
隣に座って袋からアイスを取り出すと、ルシファルさんがじーっとこちらを見つめてきた。
「でもオレンジも美味しそうね……」
「あー、一口食べます？」
「戴きますわ」
ちろちろと美味しそうにアイスを舐めるルシファルさん。大人びて見えるが、彼女の行動や言動は意外と子供じみている。邪気を感じさせない笑顔が、私の目に可愛らしく映る。
「ふわぁあ……」
「あ、眠くなってきました？」
「ねむくなってきました……」
眠気を堪えてごしごしと目を擦るその姿に魔王としての威厳や貫禄なんてものは微塵もなく、年相応どころか本来のそれ未満の雰囲気を感じさせる。リビングで寝ると風邪をひきますよ、と囁くと、「そん

なことはないですよ……」と唇を尖らせつつも、ゆっくりと重い腰を上げ、寝室へとふらふら歩き出した――かと思いきや振り返ってこちらへと倒れかかってきた。
「ちょ、ルシファルさん!?」
「連れてって……」
「今行けそうだったじゃないですか！」
「もう一歩も動けませんの」
「運んでくれないなら、ここでこのまま眠るだけですわ……」と呟いてルシファルさんは欠伸をした。嘆息して、渋々「わかりました」と彼女の体を持ち上げる。
「相変わらず、細いのに力強いのね」
「一言余計ですよっと！」
　両手はお姫様抱っこで塞がっているため、足で半開きだった寝室の扉を開く。
　ルシファルさんをベッドに寝かせ、そっと立ち去ろうとすると腕をガシッと掴まれた。驚いて振り返ると、そのままの勢いで体制を崩し、流れるようにルシファルさんの体の上へとうつ伏せで倒れ込んでいた。お腹の辺りに妙に柔らかい感触があった。
「うおっ……いきなり何するんですか、もう。割と勢いよくダイブしちゃいましたけど、大丈夫ですか？」
　言いながら起き上がろうとすると、腰周りにがっしり手を回され、ルシファルさんに体を押し付けるような形でホールドされた。加減はしているのだろうが、苦しさすら伴うそれに、眉を顰めた。
「……痛いです」
「あら、失礼しましたわ」
　軽く力を緩めてくれたが、離してはくれなかった。それは喩えるなら、割れ物に触れるかのような力具合だった。
「どうしてこんなことを？」
「離れてほしくなかったんですもの」
「ちょっとくらい我慢してくださいよ」
「一晩も一緒にいないなんて、目覚める頃には気が狂ってしまうわ」

「自分に都合のいいところだけを要求するなら、人形遊びと変わりませんよ？」
「好きなら相手に合わせるべきじゃないかしらぁ？」
「その言葉はそのままお返ししますよ」
ふう、と小さく息を吐くのが聞こえた。そこそこ長い付き合いから、それが諦めを意味するものだということはすぐに分かった。
「大人しく諦めましょう」
「やけに素直ですね」
「そのかわり」
ぐいっ、と物凄い力で体が転がされた。キングサイズのベッドはゆとりがすごくて、軽く転がってもまだまだ余裕がある。ルシファルさんが私の上になり、先ほどまでと逆の体勢になる。
「私が眠るまで離しません」
「そうですか」
これは何を言っても無理なヤツだなあ、と諦めて、彼女の腰に手を回す。早く眠りに落ちることを祈って。
「おやすみなさい」
「おやすみなさい」
無論、したかったことを何一つせず朝を迎えた。

快適に目覚めた四十分後

目覚めるといつも以上に爽やかな気分で、感動しながら大きく伸びをした。何故こんなにも爽やかなのか、その答えは容易に想像がつく。重しとなっていたルシファルさんが既にいなくなっているからである。やはり寝苦しかったようで、寝巻きには結構な量の汗が滲んでいた。シャワーを浴びようと思い、のそのそ起き上がると、案の定朝食の用意をするルシファルさんがいた。

「おはようございます、ルシファルさん」

「おはよう、アナタ♪」

銀髪のポニーテールを揺らし、下手な鼻歌を交えながらスープの出汁をとるその姿は、誰がどう見ても上機嫌だった。何かあったのだろうか。

「ルシファルさん、なんか楽しそうですね……」

「あら、わかります？」

エプロンの裾を掴みながら華麗にくるっと一回転半回り、彼女は微笑む。

「でも、この晴れ晴れとした気分でいるのはアナタのおかげなのよ？」

「はあ」

イマイチピンとこないので曖昧な返事をしてしまう。「聞きたいかしら？」とどこかソワソワしながらスープを混ぜるルシファルさんに、「いえ別に」と返して珈琲を淹れ始める。シャワーは諦めた。

「そう……」

残念そうにサラダを盛り始めるルシファルさん。パンの入ったバスケットを置き、スープが並んだ辺りで「実はね」と話が始まった。

「結局話すんですか」

「だって嬉しかったんだもの」

「まあ聞きましょう」

いただきますと手を合わせ、パンにバターを塗り始める。サラダを

一口食べ、スープを一口啜る。久々に洋風の朝だな、なんて考えていると妙な視線を感じたので顔を上げてみた。ルシファルさんがまたも上機嫌そうにむふふと笑っている。
「これまたどうしたんですか」
「自分の作った料理が愛する人の血となり肉となるというのは、なんとも素敵なことですわね」
「そうですねえ」
今日はいつもより輪をかけて変だなあ、と珈琲を口に運びながら思う。じーっとこちらを見つめているようだったので、目を合わさないようにゆっくりマグカップを傾けていった。
「で、今私が晴れ晴れとした気分でいるのは全てアナタのおかげなのだけれど」
「私、何かしましたっけ」
「ふふふふふ」
ルシファルさんは左手で頬杖をつき、幸せそうに微笑むだけだった。そこまで聞きたいわけではなかったが、こうも焦らされると流石に気になってくる。もしかすると、初めからそういう策略だったのか……流石にそれはないと思うが。

「朝、寝苦しくて目を覚ましたのよ」
「ほう」
「妙に胸が苦しいわ、と思ったらアナタが挟まっているものだから」
「私も妙に息苦しいなと思っていたのです」
「可愛かったし嬉しかったのだけれど、朝食の用意もあるから離れさせてもらいましょう、と断腸の思いでアナタの頭を掴んだその時です。
何か遠くの方で物音が聞こえるようで、これは何かしら、と耳をすませてみたのです。すると……」
「すると？」
思い出すだけで喜びを抑えきれないようで、またもや笑いが挟まってきた。しかしまあ、彼女が幸せなら満足だなとも思う。

「よく聞くとアナタが喋っていて、寝言かしらと耳を近づけて聞いてみると」
「聞いてみると……？
「『ルシファル……』って、カッコイイ声で私の名前を呼んでくれていたのよ！　ちゃんと呼び捨てで！」
　喜びここに極まれり、といった感じで快活に話すルシファルさん。小さく咳払いして、残っていたパンにかぶりついた。
「……他に何か言ってました？」
「何かブツブツと喋っていたようなのだけれど、よく聞こえなかったわ」
「そうですか」
　珈琲を飲み干し、「ルシファルさんも食べましょうよ。貴女の料理はちゃんと美味しいですよ？」とサラダにフォークを刺し、彼女の口まで運んでみる。「んー!!」と頬を林檎のようにして喜ぶルシファルさんを微笑ましく思いながら、夢の内容を思い出して小さく口元を歪めた。

お昼ごはんの二時間前

「ふあぁ……」
　大きく欠伸をして腕を伸ばすと、コキリと子気味良い音が肩から響いた。その勢いで腕を回してみると、続けてポキポキと音が鳴る。やはり変な姿勢で寝るのはよくないな、と思いながら珈琲を口に運んだ。
　嫁は仕事に追われている為、一人でのんびり過ごせる平日の午前である。昨日と同じく庭園で、読書でもしながら時間を潰そうと思ってここに来た。ここに来たのだが……
「はい、どうぞ」
「あ、どうもっす！　いや～、魔夫様にわざわざコーヒーをいれてもらうなんて、恐れ多くて恐れ多くて……」
「別に気にしなくていいよ」
「あ、そうっすか？　あざますー！　普段の数倍美味しく飲めそうっす！」
「たしかに気にしなくていいと言ったけれど、もう少しくらいは気にしてくれ」
　先程ここに着いた時には既に先客がいた。それが彼、グレラだ。
　私の指定席付近に置いてある、お気に入りの（ちょっと高かった）コーヒーメーカーと難しい表情で睨めっこしていた彼は、私の姿が見えると顔をぱあっと明るくし、「まおさまー!!」とブンブン手を振りながら、静かな庭園に相応しくない声量で叫んだ。
「えーっと……グレラくん？」
「そうっす！覚えていただけて恐悦至極の極みっす！」
「意味が重複してるぞ」
　果たして私に何の用なのかと無駄に身構えていたが、どうやらただの興味と好意らしい。珈琲を飲んで嬉しそうに頬を緩めている。
「ぷはー！　美味いっす！　やっぱり王族の方が口にするコーヒーは最高なんすね！」

「そりゃどうも。セールで安くなってるのを見計らって買ってきただけのことはあるね」
　自分で言うのも何だが、私は結構ケチなのだ。ガポガポ金を突っ込んで最高級の物を手に入れるよりは、最低限の金でそこそこの品を楽しむ方が大変良い。普段から高級品ばかり嗜好しているとその有難味が薄れてしまうし、このくらいが丁度いいのである。きっと。余談だが、嫁は容赦なく馬鹿高いものを買って馬鹿高いものを私に出してくる。
　珈琲を一気に飲み終わった様子のグレラは、さっきまでの明るい顔から一転、真剣な表情で「あの、まおさま」と言った。
「急に改まっちゃって一体どうしたんだい？」
「図々しいのは百も承知っすが……一つお願いがあるっす」
「……言ってみなよ」
　その言葉を聞いて何となく、嫌な予感がした。そういう態度でのお願いに全くと言っていいほどいい思い出がない。一応権力者の伴侶という立場になってからというもの、権力（ソレ）目当てにどれだけの人、魔族が寄ってきたことか。この子もそういう手合いなのだろうか、と疑いながら二の句を待った。
「あの、実はですね……」
「……」
「コーヒーの……」
「……？」
「コーヒーのおかわりが欲しいんすけど……いいっすか……？」
「……はあ!?」
「え、やっぱりダメっすか……？」
「しょうがないなあ、入れてあげましょう！」
　私のシリアスな気持ちを返してくれ、って感じだ。しかし私は、そういうアホは嫌いではないのだった。メーカーの中に残っていた分をすべてカップにぶち込み、中身が溢れない程度に乱暴に彼に渡す。
「ど、どうかしたんすか？　なんかオレ、気に触ることでも言いました……？」

「ああ、まあそれなりにね……」
「ええ、そうなんすか!?　よくわからないっすけどサーセンした！」
「謝ってくれたから許すとしよう」
「わあい、ありがとうございまっす！」
　安心したように珈琲のおかわりを飲み始めるグレラ君。まったく、面白い男だ。そう思って、笑った。
「グレラ君。君暇なら、明日からもここに来るといいよ」
「え、いいんすか!?」
「うん。私は大体ここでのんびりしてるからさ、話し相手にでもなってくれればありがたい」
「うわあ、じゃあ仕事をサボってでも来させてもらうっす！」
「そこは働いてくれ」
　一人のティータイムよりも二人のティータイムの方が心地良いと、しみじみ思いながら高くなったお日様を眺めるのだった。

喧嘩が始まる三分十秒前

「珈琲、もう一杯いかが？」
「どうも、いただきます」
　裸エプロンで珈琲を注ぐ、ルシファルさんの姿にも慣れ始めた朝。朝食の後片付けでも手伝おうか、と立ち上がってみるが、丁度コーヒーを持ってきた彼女にすぐさま「貴方は休んでいてくださいな」と座らされてしまった。
「別に、お手洗いに向かおうとしただけですよ」
「嘘ばっかり。でも、お心遣いは嬉しいわ」
　ぐぬぬ、どうやらお見通しらしい。別にわかりやすい性格をしているつもりはないのだが、彼女にはやけに心を読まれている気がする。恥ずかしながらお金の収入を彼女に頼りきってしまっているため、自分の出来ることくらいは自分でしたいのだが、ルシファルさんは高位で高貴な地位と身分の割に献身的である。
「貴方だからこそ、よ」
　台布巾で机を拭きながら、こちらを見てウィンクするルシファルさん。何だろう、私ごときの思考は完全に把握されてしまっているのだろうか。いいや、そんな訳はない、と思い直して首を振る。
「……ルシファルさん、絶対何かしてるでしょ」
「ぎくっ」
　わかりやすいオノマトペと逸れた目が、全てを物語っている。上擦る声で「何もしてませんよー」と台所の方に向かおうとするルシファルさんを引き止める。
「ああいえ、別にいいんですよ？　ルシファルさんが私に隠れて、私に対して何かしていようと。ただ、それは正しい夫婦の形と言えるのかなあって……」
「ぐぬぬぬ……」
「まあ私はルシファルさんのことを信用してますし、そんなことする方ではないよなーと確信しているので心配はいりませんが……」

「うう、信用を逆手に取るやり方は卑怯よ……わかりました、正直に言いましょう」
卑怯なのはどっちだ、という言葉は飲み込んだ。次の言葉を待つことにする。ルシファルさんは、バツが悪そうに人差し指をつんつんと突き合わせ、モゴモゴと説明を始める。
「その……私、貴方が浮気でもするんじゃないかって不安になって……」
「……」
「万が一他の娘に気が移ってたら……と思うと、いても立ってもいられなくなって……」
「……」
「それで、昨日貴方に……読心の魔法をかけちゃって……」
「……」
「ごめんなさい、私……怖かったのよ……」
「……ルシファルさん」
「……はい」
「心配し過ぎです」
「あへっ」
コツン、と暗い顔をした彼女のおでこを小突いた。驚いた様子のルシファルさんは、未だ不安そうにこちらを見つめる。
「怒って……ないの？」
「そりゃあまあ少しくらいは。でも、別に読まれて恥ずかしいことなんて考えませんし」
ほとんど城の中から出ない上に私たちの身の回りに女性などほとんど一人も置かれていないので、そんな心配など少しもいらないのだが。心配性過ぎる嫁が逆に心配になって、小さく嘆息した。
「とはいえ流石に、読まれてるって分かっちゃうと良い気はしないので、出来れば今すぐ解除してもらいたいです」
「わかりましたわ。今すぐ解除いたしましょう……本当に、ごめんなさい」
ルシファルさんは深く頭を下げた。何分服装が服装なので、色々と

際どいことになっている。
「頭を上げてくださいルシファルさん。人間誰にも間違いはありますし……いや、ルシファルさん人間じゃないけど……素直に謝ってくれたんですから、許しますよ。解除もしたんですよね？」
「ああ、貴方ったら本当になんて心の広い人……！　貴方が不倫するなんて京が一にも有り得ない浅ましい妄想をしてしまった私が、本当に恥ずかしいわ……魔法も解除しました、安心してください」
「そうですか」
――ありがとうルシファル、愛してるよ。
「!!!!!」
「やっぱり解除してないじゃないですか」
「え、ええと……だ、騙したのね！」
「それはこっちの台詞です」
目を見開き頬を林檎色にして、わかりやすく動揺したルシファルさんの様子から魔法を解除してないのは察せた。わかり易過ぎる人である。
「い、今の言葉も……私の反応を引き出すための、ウソだったんですか……？」
「んー、どうでしょう」
「よ、呼び捨てにまでしてくれたのに……」
「その方が反応が見やすいと思ったので」
「うぅうぅ……」
悔しさと悲しさと恥ずかしさが入り混じったような表情で、真っ赤なルシファルさんがバシバシと私の体を叩き始めた。
「それは卑怯ですよ……！」
「ルシファルさんだって私に嘘つきましたし、お互い様でしょう」
「だって……」
駄々をこねる子供のように無垢に唇を尖らせ、ルシファルさんは掠れるような声で呟いた。
「貴方がこんなにも余所余所しいから……女として、見てもらえてないんじゃないかしらって……」

「……」
沈黙が場を包む。それを壊すようにふー、と大きく息を吐き。彼女の肩を掴み、無理矢理こちらを向かせる。
「な……なにを」
「ルシファル、愛してる」
刹那、彼女が石膏像のようにがっしりと固まった。本当に心臓が動いてないのではないか、と心配に感じさせるほどがっしりと。心肺だけに。
「……ルシファルさん？　これでも、恥を偲んで必死に言ったので何か反応をいただきたいんですが……」
「……はっ。幸福感と多幸感で飛びかけてたわ……」
「早く戻ってきてください」
「あ、ええと……ふん、そんな口先だけの言葉に惑わされるものですか……！」
「本心ですよ」
「な、なら行動で示してもらわないと……わからないわ……！」
「はあ……」
「いいのよ、嫌なら別……に……」
ぎゅ、と強く、それでいて優しく、儚げに抱き締める。割れ物でも扱うように、クッションでも潰すように。
いつの間にか彼女も私の腰に手を回し、完全に密着する形になっていた。
「……すいません、今の私にはこれが限界です」
「……いいわ。私の方こそ、色々とごめんなさい」
「これでおあいこです」
「でも、たまには呼び捨てにされたいし敬語も抜きにしたいわ……」
「我儘ですね……」
「我儘だから、魔王なのよ」
「急に職業をアピールしてきましたね。それを言われると、現状ヒモ同然である私としては厳しいです」
「むふふ」

ルシファルさんからは、風呂上がりみたいないい匂いがした。
「ルシファルさん。別に、これからも読心してもらって構いません。気にしないことにしました。やましいこともありませんし。それでルシファルさんが安心してくれるなら、安いものです」
「いえ、これからは本当にしないことにするわ」
「えっ、いいんですか？」
「ええ。だって貴方を、自分の魅力で逃がさなければいいだけですものね？」
「ええ、きっと私は逃げられません」
最後に、――――――――と心の中で思って、もう一度強く抱き締めた。

来客を迎える一分半前

「そういえば今日、来客があるのよ」
「えっ」
お皿を洗いながらルシファルさんは、唐突にそう切り出した。
「来客……って一体どなたが？」
「四地王の何人かが、久々に会いたいみたいで」
私には貴方に割く時間しかないのに困ったものよねえ、と、もう大分慣れた手つきでお皿を拭きながら、ルシファルさんは口を緩めた。なんやかんやで自分を慕ってくれる彼らと会うのは嫌じゃないらしい。とはいえ、ルシファルさんを慕う彼らは相対的に私のことが嫌いなので、私抜きで会ってほしい。それはそれで暗殺の危険があるのだが。

――四地王（しちおう）。それはかつて魔王と謳われ恐れられた、ルシファルさんの側近にして信者の集団。読んで字のごとく、四人いるから四地王。四天王の方が語呂がいいのだが、天に歯向かう彼女には相応しくない、とか何とかで四地王らしい。いずれも曲者揃いの恐ろしい集団である。一人一人が世界を滅ぼしうる力を持っているとかそんな話もあるが、多分ルシファルさんがその気にならない限り三人は無害なので大丈夫だ。
「で、誰と誰が来るんですか？」
「ジンとローザとザラキアですって」
「癖の強いメンツですね」
癖の弱いメンツがいないのが四地王だが。残り一人は来ないのがわかっていたので実質四地王オールスターだ。しかもうち二人は切欠さえあれば私を殺しにかかってくる。どう動くのがよいだろう、と珈琲を飲みながら思案し始めた。
キンコーン、と唐突に部屋の呼び鈴が鳴る。
「あら、もう着いたみたいね」
「えっ早っ!?」

今行きますよー、とドアの方へ駆け出すルシファルさんを引き止める。ちょっと待ってちょっと待って、貴女が行くとまずいんだ。
「どうして？」
ルシファルさんは不思議そうに首をかしげた。しかし、ここは止めねばならないので事情を話す。
「ほら、覚えてません？　前にザラキア君招いた時にルシファルさんがお出迎えして、部屋入ってすぐに『魔王様に御足労わずらわせるとは貴様それでも婿たる人間なのかァァァァァ!!!　そもそも貴様を婿と認めた覚えはないがなァァァァァァ!!!』ってすげー形相でキレてきたの」
「そういえば、そんなこともありました。でもその時に確か『私が好きでやっているのだからいいでしょう？　貴方ごときが夫婦（ワタシタチ）に口出ししないで下さる？』って諌めたら泣いて吐血して詫びてきたんじゃなかったかしら」
正確に言うならば、変わってしまった魔王を思って泣き、しかし魔王に怒られ気圧された悦びで泣き、そもそも魔王の行動に対して口答えしてしまった自分の愚かさに吐血した――と、本人が言っていた。つまるところ、四地王とはそういう集団である。ザラキア君はまあ、その中でも素直というか、わかりやすい部類だが。
「ということで、私が出てくるわ」
「わかりました、お願いします」
何か嫌な予感がするな、と思ったが、ザラキア君が来る時点で嫌なことが起きるのは確定しているので、気にする必要はないと思った。
「はーい、いらっしゃいザラキア。お久しぶりね？」
「久方ぶりです、我が魔王よぉぉ!!　至高の御身に会えることをこのザラキア、三日前より只管渇望して……かつ……ぼ……う……？」
城内に作られた私たちの住居には、しっかり玄関が存在する。その玄関までは廊下を挟まず、リビングから地続きだ。声はダダ漏れである。故にこの時の、彼の絶叫は鼓膜が破れそうなほどしっかり聞こえてきた。

「なーーーーんーーーーーでーーーーーすーーーーーとーーーーーー!?!?」

そして私は嫌な予感の正体に気づく。――あ、そういえばルシファルさんは裸エプロンのままだった――と。

文句を言われる四秒前

「王たるものがそんな淫らな格好をしてはいけません!! 軍全体の指揮に関わりますぞ、下手すると男衆全員王の魅力で骨抜きとなってしまい敗北に直結ッ! そもそも、それでは王が風邪を引いてしまうかもしれないッ!! おのれ人間、よくも我が御方にこのような辱めを……!!!」

「まあまあまあまあ、落ち着いてくださいザラキアさん」

「これが落ち着いていられるか!! こんな、こんなもの……ッ!! ガハッ!!」

ザラキアさんの顔から、滝のように血が滴り落ちる。正確に言えば鼻から。しかし彼にはそれに抗う術がない。何故なら、両手は目を覆うことに使われているからだ。

「ザラキア、すごいことになってて見苦しいのだけれど……」

「ハッ!?!? 私としたことが何たる失敗……! 面目ない、出直して参ります!!!」

そう言ってザラキアさんは、ヘンゼルとグレーテルよろしく血痕を散らしながら、ひとまず部屋の外へと去っていった。

「慌ただしい人ね」

「ええ、本当に……」

喧しいし落ち着きがないし威厳がない。強大な力の割に、子供っぽい部分が多い人なので、次何をするのかが全然読めなくて面白いと思う。私の勝手な憶測だが、ルシファルさんは彼のことを四地王の中でも特に気に入ってる気がする。

数分して、鼻の詰め物と共にようやく帰ってきたザラキアさんは、開口一番私を指さした。

「婿。王の淫らな格好は貴様の趣味だな!?」

「いや、私じゃなくてジンさんの趣味ですし最近はルシファルさんの趣味でもあります」

「何ィ!? ジンの奴……! ふざけたことを……ッ!! ってお待ちください我が王!? 貴女の趣味でもある、とは一体どういうことか!?!?!?」
「うーん、なんていうか……気に入っちゃったのよね、この格好」
涼しいし、動きやすいし。そういって、くるっとその場で一回転して見せるルシファルさん。ぐほあ、と間抜けな声と、何かを発射するようなスポンという効果音。鼻栓が一本飛んで行った。
「き、貴様……! 何故平然としていられる!?」
上を向くことで必死に鼻血を留めながら、ザラキアさんはビッと指を私に向けた。何かの漫画で見たような独特なポーズになってるなー、なんて思いながら答える。
「んー……見慣れたから……?」
「見・慣・れ・ただとお!? 貴様! 我がルシファル様に、見慣れたというのか!?!? 我なんて数百年お仕えした今でさえ謁見の度ドキドキしておるというのに!!!!」
素早く軽やかに、さながら獲物を狩る獅子のごとき勢い・形相で首根っこをがっしりと掴んでくるザラキアさん。鼻血止まったんですね。選択肢を間違えたな、と心の中で嘆息した。ごめん、ザラキアさん。
「やめなさいザラキア。殺すわよ?」
言い終わるが刹那、ザラキアさんの体は太い槍のようなもので頭から尻まで、さながら串焼きの具のように貫かれた。脳天まで深々と槍が刺さったことに気づき、一瞬遅れてザラキアさんが叫ぶ。
「ウオオオオオ!?!?!」
「あ、ごめんなさい。手が滑ったわ」
ルシファルさんの手の甲には魔法陣が浮かんでいた。なるほど、アレを使って詠唱を省略し、魔法を瞬間発動させたらしい。悪びれる様子も申し訳なさげな様子もなく、ただただ『やっちゃったなあ』って感じの声音でルシファルさんはそう言った。
「いえ、お気になさらず。王の一撃で目が覚めました。貴女が正しい、悪いのは我。貴女こそが世界の真理なのだから当然です。とはいえ、我が王の晴れ着に見慣れたなどと抜かすその男を許すことは、我には

出来ませんなッ！」
「晴れ着っていうか既に普段着なんですけど」
「そうねえ……んー、私としても、見慣れられるのは少し寂しいわ……」
　何かを考える様子のルシファルさん。じーっとこちらを見ている。何やら嫌な予感。
「ねえ、貴方は何なら飽きないかしら？」
　ふっ、と妖艶に微笑んで彼女が問うた。嫌な質問だ、と内心で眉を顰めた。下手な格好をされちゃあこちらの精神がもたない。
「いいですか、ルシファルさん。どんな姿だろうと、生きている以上はいずれ慣れというものが訪れます。私が貴女にどんな格好をしてもらおうと、必ずそれは訪れてしまうのです。だとするなら、勿体ないと思いませんか？」
「勿体ない？」
　ええそうです、と頷いてみせる。
「貴女という美しい一輪の花を飾る、数々の衣装（コスチューム）。それを味わい尽くさぬまま次へゴー、なんてガムを数口噛んで捨てるくらいの愚行ですよ」
「あ、あら。そう言われると照れますわ」
　頬をうっすら赤く染め、照れたようにルシファルさんは笑う。それを見て胸の辺りを押さえるザラキアさんだが、こちらの視線に気づいた途端中指を立ててきた。が、楽しそうなルシファルさんを見て、悔しそうに親指も立てた。というか、未だに槍が突き刺さったままで大変シュールなのだが。
「そんなわけで、今しばらくその格好でいてほしいなー、と私は思うのです」
「あなたがそう望むのなら、私はそれに従うだけだわ。だって妻ですもの♪」
　彼女の無邪気な笑顔に、ぐはあ、とザラキアさんが吐血した。長々と槍に貫かれているせいかもしれないが、私には判別がつかない。わかるのは、ルシファルさんの行動は全て彼にとっての喜びに変換され

るということだけだった。
「そういえばそろそろお昼時ね。ザラキアもご飯、食べていくのでしょう？」
「ル、ルシファル様の手料理……!?　ご相伴に預かれるのなら、是非ッ！　是非にッ!!」
　串の刺さったままの彼が言うと、彼自身が食材にされそうで中々面白いよな、なんて考えて心の中で笑った。流石に口には出せまい。
「というか、そろそろ抜いてあげた方がいいんじゃないですか？」
「それもそうですわね」
「い、いえ!!　抜かないでいただけないでしょうか、我が魔王よ！」
「はい？」
　流石のルシファルさんも首を傾げて聞き返す。すぐに「まあ、嫌なら別にいいのですけれど」と言って、食事の準備に取りかかったが。
「これこそはルシファル様による、私への戒め――この痛みと感触を忘れぬようにし、二度と同じ過ちを繰り返さぬようにしなければならない――――」
「……」
　多分私が夫である限り、幾度となくその感触を味わうことになると思いますよ、と教えてあげようかと思ったが、命が惜しいのでやめておいた。
　綺麗な鼻歌とともに、美味しそうな匂いが漂ってきた昼下がりである。

絶叫の聞こえる五分前

「そういえば、残りのお二人はどうされたんですか？」
「……ハア……」
　私がそう聞くと、ザラキアさんは深い溜息を吐いた。
「アイツらは許せん、絶対に許せん」
「な、何があったんですか」
「ローザは『えー、今日はダメよ☆　ルシファルちゃんに顔向けできるような、いいコーディネートが出来ないもん♡』だとか何とか抜かして、謁見の約束を反故にしたのだ……ッ！」
「あー、なるほど……」
　拳をプルプル震わせながら、強く握り締めるザラキアさんを見て、四地王ってメンバーの中で真面目なのはこの人だけなんだよなと思い出す。大変苦労人である。
「……聞くまでもなさそうですけど、ジンは？」
「『まだその時じゃないさ』とか意味の分からないことを言っていた。なら何故提案した時頷いた……ッ!!」
「本当にその通りですね」
「あの子達らしいわね」
　ふっ、と慈母のような微笑を引っ提げて、ルシファルさんは机上に皿を置き始めた。
「お待たせしましたわ、お昼ご飯ですよ」
「おお……ッ！　これが……ッ!!」
　見てるこっちがびっくりするほど目を見開くザラキアさん。その目は昼ごはんを見据えている。そしてその表情のまま固まっている。
　まず三つのコップに入った麦茶。そしてその隣にも、麦茶のような色をした液体。そしてドン、と大きな器からはみ出すほど盛られた、白く細長い麺の集合体。つまりは冷麦の山。「ザラキア、結構大食いだったのを思い出したから、奮発して茹で過ぎちゃったわ」とルシ

ファルさんは言った。
「ま、魔王……これが本日の昼食でございますか？」
「ええ、そうだけれど……ザラキア、冷麦は嫌いだったかしら？」
「い、いえッ!!!　滅相もございません、好物にございます!!!」
　大方彼女の手料理が食べられると期待していたのだろうが、どっこい残念、ここ最近の昼食はずーっとこれである。私が夏バテ気味で普通の料理を食べられないのが原因なので、ザラキアさんには少し申し訳ないことをしたかなーと思いながら、内心でちょっと笑った。表情には出さない。
「そう、ならどんどん食べてね？」
「いただきます!!　うむ、魔王様が茹でてくれたという現実だけでいくらでも喰える!!」
「そのまま食べるんですね……つゆに浸けた方が美味しいですよ？」
「貴様に言われなくともわかっている！　最初は素材の味を楽しみたかっただけだ!!」
　器から直接、冷麦をバクバクすごい勢いで食べているザラキアさんにそう助言すると、彼は大量の冷や麦を薄茶色の液体につけ、ズルズルと一気にかきこんだ。と同時に噎せた。そっちはお茶である。
「ゴホ、ゴホ、ガハァー！　む、婿貴様!!!　さては謀ったな???」
「いや、まさか引っかかるとは思ってなかったですし……」
「うふふふふふふふふふふふふ」
「ま、魔王様!?」
　ルシファルさんはそんなザラキアさんの様子を見て、楽しそうに笑い始めた。目は少しも笑っていない。
「ザラキア、よくも私が貴様如きのために直々に用意した昼食を台無しにしてくれたな……？」
「い、いえっ!?!!!　滅相もございません、大変美味しゅう冷麦でございガフォアっ!?!!」
「ずずずずず」
　食物が喉を通らなくなる前に、急いで冷麦をかき込む。やはり夏の昼食はこれに限るな、と断末魔をバックに思った。

思い返すのは数年前

「相変わらず騒々しい人だったわね」
「そうですね」
　夜。ザラキアは帰ったので、三人で騒いだ後片付けを二人で行う。久々にこの部屋が賑やかになったし、いい時間だったと思う。散らばったトランプをまとめて箱に閉まっていると、ルシファルがため息を吐きながら言う。
「ごめんなさいね、いい加減私じゃなくて、私の夫である貴方の方を敬うようにと言い聞かせてはいるのだけれど……ザラキアも、聞き分けが悪くて困りますわ」
「別にいいですよ。誰を敬うかなんてその人の自由ですし、私より、ルシファルさんが尊敬されてる方が、私も嬉しいです」
　夫として、誇らしいですよ――と伝えると、ルシファルさんは「まったく、謙虚なんだから」といって、嬉しそうに頬を赤らめた。
「しかも尊敬してくれてるのが、あれだけ立派な部下とくれば尚更です」
「そんなに立派かしら？」
「ええ」
　ザラキア＝ラーズヘルト――魔族の中でも有数の公爵の家に生まれ、裕福でありながらも、立派な公主となるべく厳しく育てられ、若くして知らぬ者のいない有名魔族となる。領主としても優秀で臣民の期待も厚く、将来を嘱望されていたが、ある一つの戦いで彼の未来は潰えることになる。
「私からするとそこら辺の負け犬、って程度の印象しかなかったのだけれど……貴方が言うならきっと立派なのね」
「ルシファルさん、他人にビックリするほど関心ないですよね……」
「有象無象なんて気にする必要ないもの」
　まあ前に比べれば見どころも増えたわね――と、満更でもなさそうにルシファルは呟く。

――領主になって一年ほどして、彼は新興魔族に戦を挑まれる。魔族同士の戦は領主の命を懸けた真剣勝負だ。敗者は勝者に絶対服従、大抵の場合見せしめに処刑されるらしい。まだ若いとはいえ、名家であるラーズヘルトの当主、ザラキアに挑むなんて命知らずもいいところだ、と民衆や、当のザラキアさえも、新興魔族の無謀さに呆れていたらしい。

――無論、そんな魔族たちの予想は覆されることとなる。ラーズヘルト家――いや、ザラキアは惨敗したのだ。

「ルシファルさんがザラキアさんに勝った時って、ルシファルさん達の軍って何人ぐらいいたんでしたっけ？」

「ええと……百人とかそのくらいだったかしら？　既にジンもローザもルーティもいたけれど」

「その三人がいる時点でザラキアさんに勝ち目ないですよね」

仮にラーズヘルト家に五万の軍勢があろうが、彼女達がいる時点で万に一つも白星はありえない。雑兵を容赦なく蹂躙し、苦もなく歩を進めるのが魔王とその軍勢なのだから。

「で、ルシファルさんは百人の軍勢と共にザラキアさんたちをボッコボコにして、おぼっちゃまだったザラキアさんのプライドをズタズタにしたんですよね」

「あまり覚えてないけれど、どうでもいいくらいに弱くて眠かったことだけ記憶していますわ。あ、確か戦ってる最中に欠伸しちゃって、ザラキアが『神聖な戦いの中であろうことか欠伸をするなど……ッ！貴様、私を愚弄しているのかッ!!』ってキャンキャン吠えるから、愚弄する必要がないほどどうでもいい、って教えてあげた覚えがあるわ」

「ほうほう。すごくザラキアさんっぽい」

「それを伝えたら怒って短絡的に攻めてくるものだから、返り討ちにして適当に遊んであげてたのよ。そうしたらそのうちにジンたちが彼の領土の制圧を終えてて、私たちの勝ちが決まったのでザラキアにも教えてあげたの。そうしたら」

「お呼びですか、我が魔王ッ!!」

ドタバタバッタン、と扉の開く音と、聞き慣れた大きな声が聞こえてきた。見るまでもなくザラキアだ。
「呼んでないわ。土に帰ってくれる？　貴方ごときに私と夫のプレシャスでプライベートな時間を奪う価値はないのだけれど」
「申し訳ありません、魔王！　しかし、ここに一つ忘れ物をしてしまったもので……」
「もしかして、変な人形がついてた鍵のこと？」
「そう、それです！　魔王様のストラップがついたその鍵です！　して、どこにございますでしょうか？」
「旦那様の物じゃないってことを確かめた後に捨てたわ。今頃ダストシュートじゃないかしら？」
「わかりました、拾って参ります！　貴重な時間を拝借して申し訳ございませんでしたッ!!」
　あの不細工なデフォルメ人形ルシファルさんだったのか。その事実に衝撃を受けつつ、走り出した背中を見送る。鍵を捨てられたというのに怒り一つ口にしないとは、大した人である。信者という言葉が悲しいほど似合う。
「話の続き、聞いてもいいですか？」
「貴方が望むのならいくらでも♪　ええと、どこまで話したのかしら」
「ザラキアさんに敗北を教えてあげる辺りです」
「あー、その辺りね」
「見つかりました魔王様ァァァ！」
　またまた慌ただしい音とともに、ザラキアが帰還した。見つけるまでが早い。ルシファルの表情があからさまに曇る。
「ザラキア。死にたくなければ私の夫に、貴方が下僕になった時の話をして差し上げて」
「貴方に殺されるなら本望ではございますが、この男にあの時の素晴らしい話を自慢してやるため、話させて頂きましょう」
　オホン、と小さく咳払いしてザラキアは話し始めた。
「魔王の熾烈なる攻撃の前に私は膝をつき、丁度魔力も底をついた。聞けば、我が民達も敗北を喫したとのこと。我は胸底から滲み出る絶

望感とともに、言葉を漏らしたのだった……『くっ、殺せ……ッ！』と」
何処ぞの女騎士か、と思うほどに見事な死の懇願だった。少し面白くなってしまって、必死に笑いを堪える。
「で、殺されたんですか？」
「違うわッ！　殺されてたら今ここにおらんだろッ!!　慈悲深き魔王様は私を見て、『貴様如きの命など奪う価値もない。どうでもいい。ただまあ、おめおめと生き延びるのなら、私の役に立ってもらおうか』と凄みのある声で仰られたのだ。そのなんと慈悲深いことか……ッ！　惨たらしい死を覚悟していた私は魔王様の心遣いに感激、感謝した。今までの私はその時死んだのだ。そしてそこからの私の人生は、魔王様に尽くすためのものに生まれ変わったのだ……ッ！」
「私に尽くすなら夫にも尽くしてほしいのだけれど」
「いや、私なんかに尽くす必要はまったくないので、今まで通りルシファルさんだけに尽くしていただければ結構ですよ」
「言われるまでもなくそのつもりだァァァ!!」
む、とした様子のルシファルさんが、ザラキアさんを昼間の如く串刺しにし始めた。折角生き延びた命なのだから、自分の好きなように使えばいいのになと思う。まあ彼女のために使うのが好きなら別にいいのだが、殺されかけた相手のために使うなんて相当クレイジーだよな、と現在進行形で殺されかけてる彼を見ながら、ワインを口にするのだった。

喧騒へ向かう三十分前

「街へ行きましょう」
「突然ですね」
　朝。いつものようにティータイムを楽しんでいると、ルシファルさんはそう提案してきた。
「珍しいですね、ルシファルさんがそんなこと言うなんて」
　珍しいのは態度だけでなく、服装もである。昨日までのような裸エプロンではなく、胸元に赤い宝石のついた、高価そうな紫色のドレスに身を包んでいる。何かあるとしか思えない。
「あら、デートに際して御粧しするのは、女として当然じゃないかしら？」
「そう言われるとそうですけど、それって公務向けにジンが用意した衣装ですよね。明らかに仕事ですよね」
「やっぱりバレちゃうわよね」
　舌をちろりと出して、悪びれる様子も見せずルシファルは微笑んだ。
「この前の式典に出席しなかったのをジンに咎められちゃってね。丁度人国の王が晩餐会を開くから、そこに顔を出してくるようにと怒られちゃったのよ」
「ふむふむ。で、そこに行くとルシファルさんは何が貰えるんですか？」
「そうねえ……美味しいご飯と夫とのデートと、それから人魔間の平和かしら？」
「前半二つは置いておいて、最後のは明らかに外行きの理由ですよね。ジンが入れ知恵した」
「……むー、なんでもお見通しね」
「貴女が読みやすいだけですよ」
　貴方に隠し事はできないわねと言って、ルシファルは珈琲のおかわりを注いだ。読心の魔術なんてものを使ってくる人には言われたく

ない。
「それで、ジンには何を？」
「ふっふふー、これよ♪」
胸の中から、数枚の紙切れが取り出された。「一体これは？」と私。
「素敵なチケットよ」とルシファル。
「えーっと……『マクロニア水族館一日見放題ペアチケット』『国立動物園一日ふれあい放題ペアチケット』『ユメノオカ展望台プラネタリウムペアチケット』……うん、なるほど」
「こういうところに一緒にお出かけしたことなかったから、してみたいなーと思ったのだけれど……嫌、だったかしら？」
「いやいや」
照れ隠しに珈琲を口に運びながら、嬉しいですよ、と答える。
「それならよかったわ。今日は時間がないから水族館だけ行って、残りもいつか絶対行きましょうね！」
「そうですね」
あのチケットってそんなに高くないはずだし、ジンから貰わなくともルシファルさんのポケットマネーなら余裕で買えるはずなのだが……まあ、彼女には言わないでおこう。その辺、ジンは扱い方を心得ているなと感心する。
「ふう。ご馳走様でした。珈琲も飲み終わったことですし、私も急いで準備してきますね」
「時間はたっぷりあるから、のんびりで大丈夫よ♪」
「はーい」
思えば街へ行くのも随分久しぶりである。久々に、少しオシャレしていこうか。そんなことを考えながら服を選び始めた。

到着の一時間前

「お待たせしました、行きましょうか」
「ええ」
　用意しておいた魔車に乗り込み、ゆらりゆらりとマクロニアまでの旅が始まった。私たちの住む城はそこそこ辺鄙な土地に建造されているので、魔法の加護を得たエコで低燃費な高速車――魔車を活用しても、一時間ほどかかる。魔車の中は空間拡張の術式のおかげでゆったり広々としているので、その間のんびりとした旅を楽しむことが出来る。
「よくお似合いですわ、その格好」
　小さなテーブル越しに向かい合ったルシファルさんが、私の服を見ながら言った。
「馬子にも衣装、ですよ」
　フカフカのシートの感触を楽しみながら、私は答える。
「まあ、まだ孫どころか子供もいないのに……♪」
「ダイナミックに勘違いしてる!?」
　何を想像したのか、「きゃー♪」と黄色い声を上げて妄想に耽ける彼女に、思わず頭を抱えた。下手に謙遜するのってよくないよな、という一つの教訓を得てしまったかもしれない。
「――こほん、お褒めいただきありがとうございます。ちょっと格好つけ過ぎたかな、とも思ったのですが」
「そんなことないわ、よくお似合いよ?」
　美麗なドレスに並び立つならこれしかないだろう、と押し入れから引っ張り出してきたのがこのタキシードだ。試着はしたことがあったが、しっかり袖を通したのは今日が初である。二年も経ってるから着れなくなっているかも、と不安だったが、私の体は悲しいくらいに成長していなかった。
「少しぎこちない所作とかが、とても可愛らしいわ」
「いや可愛さじゃなくてカッコ良さを見てくださいよ!?」
「うーん……」

「難しい顔しないでください、悲しくなるので」
　困ったようにルシファルが笑う。そんなに男らしくないのか、私は。
「大丈夫、貴方はしっかりかわ……かっこいいわ」
「言いかけてましたよね、喉から少し顔を出してましたよね!?」
　はあ、と小さく溜息を吐く。すると彼女が慌てたように、「そんなに心配なさらずとも、貴方は文句なしにかっこいいわよ」とフォローを入れてくれた。
「お世辞なら大丈夫ですよ。貴方に釣り合うようにと背伸びしてしまいましたが、若輩者にはまだ早かったみたいですね」
「あら、そんなことを気にしていたの？　それなら大丈夫よ」
　ルシファルは私の隣に擦り寄り、そっと耳元で囁いた。
「貴方は私の伴侶に相応しき、立派な佇まいをしていますわ」
「……ありがとうございます」
「フフフ」
　そう褒めて頂いたあとでポンポン、と頭を撫でられるのは些か喜んでいいのか悪いのか判別がつけづらかったが、まあそんなこんなで一時間経ち、魔車は動きを止めた。どうやら目的地に着いたようである。
「ありがとうグレラくん、帰りそうになったら連絡するわ。はいこれチップ」
「え、マジすか!?　あざっす！　ラッキー!!　逢引楽しんできてくださいね！」
　言い方に何となく感じるものがないでもなかったが、貰ったチップを片手に飛び跳ねながら、グレラくんは人混みの中に駆け出していった。
「あの運転手、知り合いなの？」
「ええ。覚えてません？　この前ルシファルさんがキレた時にいた、あの若い官僚の子」
「うーん……興味無さすぎて全然覚えてなかったけど、そういえばそんなのもいたような気がするわね」

最近そこそこ仲良くなってきているので、出来れば認識しておいてほしいと思う私なのだった。
「そろそろ行きますか。最初は何処へ？」
「ここなんかどうかしら？　そのあとは――」

魚を眺める十二分前

ここ――マクロニアは魔族と人間との親交を深める為の中立平和都市であり、魔族の魔法技術と人間の科学技術、そのどちらも取り込んで発展している、超巨大都市である。

そしてそんな街の裏通り、あるビルの裏にあるデッドスペースに、私たちは車を止めたのだった。そこは魔法により人払いがされており、何処に行っても人だらけなこの街において、数少ない静寂の空間である。無論、王族や貴族など、特別な地位にある人のための場だ。街中にはいくつかそういう空間があって、非常時など必要があれば、空間魔法での転移も可能になっている。

「よーし、じゃあ水族館行きますか」

「フフフ、楽しみですわ♪」

地元の夏祭り程度の人混みではあるが、はぐれないように、と一応手を繋いで歩く。種族差の問題か、その手は少し冷たく感じられた。夏には丁度いいが、私の手で暑い思いをさせていないかだけ少し気になった。

「むしろ温かくて気持ちいいわ。ドキドキして少し、体が熱くなってきちゃうけれど……」

「……あの、また読心の魔法使ってますよね？」

「はぅっ!?」

頬を赤らめていたルシファルさんの顔が、今度は真っ赤に染まる。反応的にどうやら、この前の約束は覚えていたが、ついつい使っちゃったぜって感じのようだ。

「ご、ごめんなさい……！　その……貴方もドキドキしてくれてるのか、気になっちゃって……」

「……で、確かめてみてどうでした？」

「んふふふ」

側頭部に頬擦りするように、ルシファルは私の腕に巻きついてきた。それが答えのようである。公道でそれは少し恥ずかしいので離

れてほしい気持ちもあったが、離す必然性がないことを思い出したので諦めた。
　ルシファルさんは仮にも魔王であり、一国のトップ。要人である。メディアにも何度か顔出しをしているのでわかる人にはわかる。更に弩級の美人である。目立って目立って仕方がない。なので認識の魔法で、若干印象をズラしている。それは外見も発言も行動も含めて。なのでこんな目立つ行動は、傍から見れば別の何かに見えるはず……である。
　それはそれとして、私の〝恥ずかしい〟という認識はズラされることなく存在しているので、是非とも離れて頂きたい。
「嫌ですわ」
「私も困るのですが」
「でも……こうしないと、はぐれてしまうかもしれませんしぃ……」
「そんな目で見ても駄目ですよ、どこで覚えたんですかそんな技」
「ジンがこうすればいいとほざいていたので、参考にしてみました♪」
「やっぱりか」
　潤んだ瞳でこちらを見つめるルシファルさんだったが、その手は通用しない。敗因を教えてあげるとすれば、身長差で上目遣いになっていないところだろう。あの男にも困ったものだ、とエレベーターのスイッチを押しながら思った。
「うん、エレベーターが広すぎてなんか気持ち悪いですね」
「そう？　さっきまでの通りが狭かったのだし、このくらいが丁度いいと思うわ」
　時短の為に裏口の荷物搬入用エレベーターを利用している訳だが、大型の荷物用に最大定員百人、積載量一トンを誇るサイズなのだから、いくらなんでも広すぎる。ついでに、庶民と貴族の感性の差を感じた気がした。
　ウィーン、という機械的な効果音とともに扉は開く。
「着きましたね」
「ここが水族館なのですね……！」
「うん、まあそうですね」

繁華街の奥、ブティックや飲食店が所狭しと並ぶ娯楽施設の上階。そこにマクロニア水族館は存在する。休日の昼下がりという混みそうな時間に反して、水族館内は静まり返っていた。受付の少し引き攣った顔をしたお姉さんに会釈し、チケットを見せた。
「お待ちしておりました。本日は貸切となっております、ごゆっくりお楽しみください」
「ええ、ありがとう♪」
そんなお姉さんには目もくれず、ルシファルさんはスタスタとゲートを通り抜けていく。微妙に申し訳ない気持ちを抱えながら距離を埋めるように歩を進める。
「いくらなんでも貸切はやりすぎな気がしますけど……」
「煩わしい喧騒の中でのデートなんて、落ち着きがなくて嫌だわ」
無人の水族館なんてそれはそれで恐ろしいと思うが、この女(ひと)がこうと言い出したら、何であろうと止まるはずがない。早々に諦めて、水族館を楽しむ方向にシフトする。まず向かったのは入口付近の水槽。熱帯魚が優雅に泳いでいる。グッピーやテトラだ。熱帯魚特有のカラフルな色合いが目を楽しませる。素直に綺麗だな、としばらく眺めていたい気持ちになる。が、逆にこちらを眺める視線に気がついたので、スタスタと歩いていく。
次、甲殻類。海老や蟹が浮き上がってたり駆け回ってたり、同じ海の仲間なのにどうして魚とこうも違う進化を遂げたのか、と不思議に思う。その思考に思いを馳せたかったが、こちらを眺める視線と時折海老と蟹に向けられる捕食者の視線に気がついたので、名残惜しく思いながらスタスタと進んでいく。
次、トンネル水槽。右も左も上も下も、三百六十度全面を魚が泳いでいる。上を見上げれば銀髪がたなびいているし、右を見れば銀髪が張り付いているし、左を見れば銀髪が揺らめいている。
「何やってるんですかルシファルさん」
「何って水族館ですし、魚を眺めているのですわ」
「私越しに眺めてもよく見えないと思いますよ」
「貴方越しに眺めなきゃ面白くないんだもの」

「間違いなく水族館に向いていないので別の場所に行った方がいいと思いますよ」
「でも普段の貴方を眺めている時と、また違った楽しさがあるのよ♪」
「さいですか……」
理解出来ない領域なので、考えないことにする。ルシファルさんが私のことを見たいように、私は水生生物が見たいのである。少し歩いてトンネルを抜けると、そこは異世界だった。毒の海で泳ぐ骨魚（ボーンフィッシュ）、獰猛で巨大な捕食者、牙鮫（ファングシャーク）。砂海の中で獲物を漁る狩猟蛸（ハンターオクト）等々、魔界のおどろおどろしい生物たちが野性味いっぱいに過ごしている。この水族館では魔界の生物たちも飼育されているのだ。
「キ……キシャアアアアアアアア!!!」
「プグルアアアアアアアアアアア!!!」
「ウゴアォアアアアアアアアアア!!!!」
「うーん騒がしい」
魔界の獰猛な生き物は大体常にお腹を空かせている。食べられそうな生命の到来を見て、どの子もガンガンガンガンと水槽を攻撃し始めた。特殊強化ガラスでできているので壊れることはないと思うが、只管喧しい。見てて面白いので、別に悪い気はしないが。
「……」
「あ、ルシファルさん」
スタスタスタ、と水槽の前まで歩き、彼女は微笑んだ。
「五月蝿い」
「「ピギィィィィィィィィ!!!??」」
魔力の波動が水槽を揺らし、水族館を揺るがし、恐らく辺り一帯まで震動させたと思う。特殊強化ガラスの水槽にはヒビが入っている。だが恐らく、もう、この子達ににそれを突き破って出てくる勇気はないだろう。だって、水槽の中の方が断然安全なのだから。
「我が伴侶を餌扱いとはいい身分だな、身の程を弁えろ畜生風情が」
射殺すように魚たちを一瞥して、ルシファルはふう、と嘆息した。
「やりすぎですよ、ルシファルさん。怒られちゃいますよ？」
「怒りたいのはこっちよ、こんな躾のなってない畜生が、水槽の中で放

し飼いになってるなんて」
「水槽の中なので放し飼いではないと思うんですけど」
三匹とも殺して今日のディナーにしてもらおうかしら、とルシファルさんは呟いた。身のない魚に硬そうな鮫、蛸。どう見ても美味しそうではないので、是非ともやめてもらいたいな、と思った。

変化を感じる一分前

「大変だった……」
「まったくですわ」
　誰のせいだ、という言葉を飲み込んで、籠を抱えて歩くルシファルさんを見遣る。中身は先程の魚たちである。私の反対も水族館員の制止も押し切り、彼女はこの魚たちを晩餐に出すことに決めたらしい。根本的にこの子達は水族館の展示物であるわけだし、観賞用であって食用ではないのだから食べても不味いに決まっているし、実際制止する職員さんも「この子達は骨が多めで身が少ないですし、味も上等とは……」って困り顔で制止していた。しかし私たちの必死の反対も押し切り、ルシファルさんはポケットマネーでこの魚たちをお買い上げしたのだ。
　不幸中の幸いと言うべきか、この子たちは魔界出身の種であるため、供給は容易である。帰ったら同じ種を早急にお渡しすることを約束し、職員さんに三回くらい謝罪して、お持ち帰りが決定した。
「さて、それじゃ少し急ぎましょうか。モタモタしてると、晩御飯にするのに間に合わないかもしれないものね？」
「えっ」
　食べる気か。マジで食べる気なのか。アレだけ忠告されたし、私も警告したのに。下手するとお腹壊すレベルですよ、と。
「ふふふ、そこは一工夫よ。例えばこの骨ぎすの魚、これなんか出汁に使えると思わない？」
　骨魚（ボーンフィッシュ）がカタカタと震えているのが籠越しに伝わってくる。先程はアレだけ凶暴だった彼らだが、ルシファルの威圧を受けてからは一転して静かになった上、彼女の抱える狭い籠に詰め込まれてからは借りてきた猫のように大人しくしている。実態は買ってきた魚なわけだけど。生殺与奪を握るルシファルは、さながら猫である。
「最近は多少、料理についての学もついてきたから知っているわよ。

肋骨である鶏ガラからはいい出汁が取れるし、大体の魚からはいい出汁が取れるのだから、骨だけの魚なんて極上の出汁が出るに違いないわ。まとめて煮込めば美味しく頂けそうよね♪」
　これには骨魚だけでなく狩猟蛸（ハンターオクト）と牙鮫（ファングシャーク）も震え始める。更にそれを見たルシファルが「籠の中が騒がしいわねぇ……今すぐかっ捌いて静かにしてあげようかしら？」なんてイライラしたように言う。
「ルシファルさん、ダメですよ。ダメダメですよ」
「あら、傷つきますわ。何がダメなのかしら？」
「魚を煮込むなら長時間、じっくりコトコト煮込まなきゃ。今日の夜ご飯になんてしたら仕込みが中途半端になるし、彼らの苦しみも微々たるものになりますよ？　それでいいんですか？」
　何よりあんなものを調理して客人に振る舞わさせられるシェフが気の毒である。私の言葉にルシファルはハッ、とした表情を浮かべ、
「流石あなた……！　そうね、その方が大変素晴らしいと思います！
　よかったわね、畜生共は明日、私がしっかり煮込んであげるわ」と、瞳をキラキラ輝かせながら言った。やれやれ、恐怖の晩餐は過ぎ去ったようだ。私の言葉の後、観念したのか魚たちは静かになった。
「それにしても、あなたも随分いいことを言うようになったわね。ザラキアが見ても、『魔王の婿に相応しくなってきたな』って言うんじゃないかしら」
「……そうですかね」
　微妙な表情、微妙な気持ち。一度表に出してしまったそれは引っ込められず、隠すことも誤魔化すこともできなかったが、ルシファルさんはそれに反応することなく「やっと着いたわね」と一言。どこに着いたかと言えば、例の車を停めてあるデッドスペースだ。流石に魚を持ってパーティに赴く訳にはいかないので、車内に放置していこうという訳である。
「……あ」
「あら、どうしたの？」
「えっと私、鍵持ってなかったなって」
　鍵は運転手であるグレラくんが持っている。これでは車内に魚を

放置することが出来ない。
「荷物を運び込む程度であれば、鍵を開ける必要はありませんわ」
ルシファルさんが空に「えいっ」と手を掲げると、空間が手を中心に歪み、穴のような亀裂が生まれた。そこに魚籠が吸い込まれる。よく見るとそれは車内の後部座席にも発生しており、そこから魚籠が現れた。高位魔法たる空間魔法の贅沢な無駄遣いである。
「これで問題ないわね、パーティーに向かいましょうか♪」
「そうですね」
空いた手を取り、ゆっくり歩き始める。間違いなく目立つだろうなぁ、目立ちたくないなぁ。

再会と謁見の十三分前

廃ビルの中に設置されたゲートを抜けると、空間魔法でマクロニアの王宮、その中の庭へと運ばれる。サッカーでも野球でも、大抵のスポーツは出来てしまいそうな広さの芝生だ。見上げれば、夕陽を受け、金銀ミスリルオリハルコンと、豪奢な宝石たちで装飾された立派な宮殿が目に映る。普段であれば観光客向けに一般開放されている庭だが、パーティーのある今日は締め切られており、人っ子一人いない。

数秒して、目の前に執事服の男が転移してきた。

「お待ちしておりました、魔王様方」

肩に手を当て、男は恭しくお辞儀する。流れるような身のこなしから、一連の動作への慣れが伝わってきた。人のよさそうな顔立ちに、ショート気味の白髪、左目にかかるモノクル。絵に描いたような執事がそこにいた。

「遅れてしまって申し訳ありません」

「いえ、滅相もございません。執事長のセバスティアンと申します、セバスとお呼びください。それではご案内させていただきます」

「よろしくお願いしますわ」

セバスの後について、彼の抜けてきたゲートをそのまま潜る。その先はクリスタル製のシャンデリアが照らす綺麗な廊下であり、目の前には巨人サイズの大きな扉があった。セバスはそれを開き、「それでは、ごゆるりとお楽しみください」と一礼した。ふう、と小さく息を吐く。

「あら？　緊張してるの？」

ルシファルは悪戯に微笑んで言った。

「そりゃあ、まあ。本来私ごときが来られる場所じゃありませんからね。社交界のマナーなんて未だによくわかりませんし、粗相をして恥をかかないか、心配で心配で堪りませんよ」

「大丈夫よ、あなたなら上手くやれるわ」

それに、もしもあなたを馬鹿にする愚か者がいたら、私が――とル

シファルが何かを言いかけたが、詳しく聞きたくないので、手を引いて歩き始める。そもそもそんな人、もういるわけがない。
中では既に、数多くの賓客が杯を交わし、料理に舌鼓を打っていた。その誰もがテレビなどでよく目にする各界の著名人であり、一般人たる私としては、緊張の度合いが少し増してしまう。とはいえ臆してもいられない、なるべく目立たないようにテーブルに近づいていく。しかしそんな健気な努力は、すぐに水泡と帰す。
「あ、我が友！　その影と幸の薄そうな雰囲気は間違いなく我が友だ！　おーい、俺だよ！　君の親友、高貴な光己（こうき）だよー！」
「……最悪だ」
陽気な声に振り返り、笑顔でこちらに近づいてくる金髪高身長イケメンに、思わず卓上の飲み物でもぶっかけてやりたくなる。しかしそれをグッと堪え、ため息交じりに口を開く。
「久しぶり、光己。ところで前に約束した、こういう場所では話しかけてくるなって話はどうなった？」
「え？　いやだなぁ我が友、こういう場所で話しかけなきゃ、オレたち一生話せないじゃないか！　だからこれからも話しかけ続ける、って前回君が来なかった時に一人で決めたんだけど……悲しいが、どうしても嫌ならもう二度と君に話しかけないと約束……しよう……ぐすっ……」
「あーいや、大丈夫だから！　これからも話しかけていいから、だから泣くな!?」
「うん、ありがとう我が友！」
そもそも話しかけてほしくなかったのは『目立ちたくないから』という酷く自分本位な理由であり、それも目立ってしまった今や何の意味もない。慰めるとけろりと泣き止み、光己は軽く抱き着いてくる。昔っからすぐ調子に乗るし、泣き虫なのも変わっていない。変わったのは身長くらいだ。旧友との再会を嬉しく思いながらも、背後に突き刺さる無数の視線と隣に感じる無言の圧力のため、光己を引き離す。
光己は同郷の友人であり、同じ釜の飯を食って育った仲である。同

い年であることも相まって仲が良かったのだが、十二歳の時その素質を見初められ、名門である十文字一族に養子として迎え入れられた。それ以来、会うこともなく過ごしていたのだけれど――縁とは奇妙なもので、結婚して以来度々こういった場所で顔を合わせるようになったのだ。

「最近どうだい、我が友？」

「最近というか、今の気分は割と最悪だね。空気の圧がすごい」

「……」

「んんー？　こんなに楽しい社交の場だというのに、何が最悪なんだい。夫婦揃って、そんな顰めっ面じゃよくないですよ。ルシファル嬢？」

誰のせいだと思ってるんだ、という言葉が読心するまでもなく伝わってくる。そんな様子のルシファルである。私に対して親しげな光己が気に食わないのか、彼女は彼のことをあまりよく思っていないらしい。ただ、数少ない私が友とする男である上、十文字一族は魔王とあれど触れづらい、面倒な地位の貴族であるため、ルシファルの癇癪一つでどうこうするわけにはいかないのだ。ジンや私が散々言い聞かせているので、こういった場では基本的に何もしないが。そこ以外でどうだかは、まあ。

閑話休題。とはいえ、光己は後ろ盾がなくとも何かされるタイプの人間ではない。それは家柄のためだけでなく、たとえルシファルが不機嫌になろうとすぐ、「とはいえ、その顰めっ面であれど君は美しい。笑えばもっと素敵なのは確かだが。いやー、お嫁さんがこんな絶世の美女だなんて、我が友は本当に幸せ者だなー！」とまさにこんな風に、白々しい称賛を投げかけるからである。

「そ、そう？　やっぱり？」

古より恐れられし魔王は、意外と褒められ慣れていない。緩んだ頬に手を当て、小首を傾げる。照れ始めたらもう、光己への怒りは何処へやらである。いつもそうなのだけれど、この辺になるとこちらを見つめる野次馬の目も消えていくので、ある意味有難い恒例の展開であ

る。
「ええ。夜の方も、さぞかし良いのだろうなと羨ましい限りで――」
「夜？」
「あ、ああ！　ルシファルさん本当に可愛いよな！　私は本当に幸せ者だよ光己！」
「あだっ!?」
「もうっ、あなたったら」
　光己を小突きながら、ルシファルに笑顔を向ける。不満そうにこちらを見つめる光己ではあったが、約束を破る方が悪い。奴もそれを薄々わかっているようで、嘆息して話を変えた。
「ところで、近々そちらに伺ってもよろしいですか？」
「え？　ええ、こちらは別に構わないけれど……」
「よく家の許可が降りたな？」
「ああ。まあいくら頑固な父上とはいえ、此度は俺の我儘じゃなくて堅実かつ現実的な商談だからね。頷かざるを得なかったのだろう」
　現十文字家当主、十文字硬柳（こうや）は、政治だとかの面倒な事情に疎いルシファルでも知っているほどの王族嫌いで有名である。それは魔族相手でも変わりないようで、王族とのやり取りは最低限なのが十文字家の特徴であった。しかしそれも光己が営業の場に立つようになってからは少しずつ変わり、今ではこうしてパーティーに参加する程度なら容認しているのだが、王族との一対一の取引となると前例がない。もしそれが実現するとすれば、明日の紙面トップを飾るのはまず間違いないだろう。十文字硬柳に許可を出させるほどの商談というのも気になる。
「まあ、詳しい話はおいおい詰めよう。今はこの素晴らしいパーティーを楽しもうじゃないか！」
　こちらの動揺を察してか、光己はそこで話を切り上げた。「積もる話もあるが、それもまた後日。また会おう、我が友よ！」と輝く笑顔で手を振って、優雅な社交場の中心へと向かっていった。ああ見えてやり手の男だ、色々なお偉いさんへのご挨拶もあるのだろう。
「まったく。本当に変な人よね、彼は」

「そうですね、最高に変な奴です」
私なんかを友とする時点で、相当に変な奴である。「何だか嬉しそうね」と頬をつついてくるルシファルに、「変な奴って、見てて楽しいじゃないですか」と返した。
「ご歓談のところ失礼します、魔王様ご夫妻」
「……！」
背後から響いたバリトンボイスに、体が小さく跳ねた。足音も気配もなかったはずだ。それでいて最近何処かで聞いたような声。小さく息を吐いて振り返る。
「心臓に悪いですよ、セバスさん」
「これは重ね重ね失礼しました」
セバスが恭しくお辞儀して言う。恐らく先程のように転移魔法で背後に現れたのだろう。私もルシファルも別に気にするタイプではないけど、割と本当に失礼な行為なのではなかろうか。
「少々お時間よろしいでしょうか？」
「よろしくてよ。手短に済むのであれば、ね」
威圧すらすることなく、ルシファルは真顔で答える。どうやら珍しいことに、結構機嫌がいいらしい。セバスは微笑んでお辞儀をし、背後のゲートを示す。
「我が主、国王レオン・ミレニウス・13世がお待ちです」
――この前の仮病について怒られなきゃいいな、とだけ思った。

無礼と謝礼の三分前

ゲートを抜けると、豪華な王宮の中でも一際絢爛な広間に出た。ふかふかなレッドカーペットのその先、緩やかな階段の上に玉座があり、そこに虫も殺さないような穏やかな表情で、それでいて威厳に満ちた雰囲気を漂わせる、恰幅のいい老人が座していた。国王レオン氏である。

「高いところから失礼。遠路遙々よくいらっしゃいましたな、魔王殿、婿殿」

「ええ、本当に。うちの夫は社交の場が苦手なのだから、あまりこういう会に誘わないでいただきたいわね」

開口一番、ルシファルはそう言った。客として態度が不遜すぎる。

「いえ、私なら大丈夫です」と、とりあえず訂正しておく。

確かに私がああいう場を苦手としているのは事実であるが、それは別に私自身の問題ではなく、正直に言えば彼女のせいである。お世辞だとか社交辞令だとか、そういった概念と無縁のルシファルは外交には向いていない。そんなものするべきでない、というレベルに適していない。とはいえ一国の主として、全てを人に任せるわけにもいかない。だから私が彼女をフォローしながら外交する羽目になって、それが大変だから苦手なのだ。まあそんなことを伝えて変わる彼女ではないので、何も言わないが。

「滅相もない。お久しぶりです、国王陛下」

「気を使わずとも構わんよ。私も形式ばった固いやり取りだとか、本心を偽っての外交は苦手だ。そういった意味では、極めて素直な魔王殿には好感が持てる」

それこそ社交辞令だとは思うが、いくら国王一人の好感を得られようが、この不遜な魔王を全人民が受け入れてくれるとは思えない。一歩間違えば、いつ戦争が再開されようがおかしくないのだ。それを止めてくれているのはひとえに、この人や周りの尽力によるものである。

「先日は式典に参加することができず、本当に申し訳ありませんでした」
「急病ならしょうがない。その後体の調子は大丈夫かね？」
「ええ、まあ」
　極めて素直と評された女は、その数秒後には嘘を吐いていた。そもそもその病気って物自体が半分くらい仮病である。
「して国王、本日は何故私たちをお呼びに？」
「いや、別に大した用でもないよ。先日会えなかったからね、様子が心配で呼ばせてもらっただけさ」
「それなら映像通話でもよかったんじゃないかしら？　そちらの方が手間がかからないし」
「そういってくれるな。やはり映像よりも直に会った方がよい。魔王殿だって、婿殿と毎日通話するよりも毎日会えた方が嬉しいだろう？」
「そんなの当然ですわ。この人以外とならどうだっていいけれど」
「ふむ。ここまで自分に興味がないことが伝わってくると、逆に気楽に感じるな」
　ハッハッハ、と王は高らかに笑った。その朗らかな表情からは、特に気分を害した様子はない。寛容すぎて逆に恐怖すら覚える。
「さて、魔王殿。申し訳ないが、少しだけ婿殿と二人きりにしてくださらんかな？」
「お断りしますわ」
　ルシファルは淡々と答えた。
「なに、すぐに終わる。それさえ済めば、もう今日は自由に過ごしてもらって構わない」
「私がいたら都合の悪いことでもあるのかしら？」
「男同士、少し話したいことがあってね。そういう意味では確かに都合が悪いといえる」
「ルシファルさん、お願いします」
「……ふむ、いいでしょう」
　手短にお願いしますわ、と言ってルシファルは踵を返した。控えて

いたセバスが、恐らく客室に繋げられたゲートを開く。もう一度だけ振り返り、私の方を向いてからゲートを潜っていった。
「さて、呼び止めて悪いね、婿殿」
「大丈夫です。とはいえ少し驚きました」
　国王と対面するのももう二桁近くになるが、このように私が呼び止められたのは初めてだ。自分で言うのもなんだが、私自身に突出した才能はない。あくまで魔王のおまけに過ぎない。そんな私に、一国の――ひいては現人類のトップが、一体何の用だというのか？
「謙遜することはない、貴殿は傑物だ。あの魔王を惚れさせ、魔族と人間の長い戦いの歴史を終わらせたのだから」
「私の力じゃありませんよ。それこそ国王がいてくれなかったらこんなに丸く収まらなかったでしょうし、何より、みんな戦いに飽き飽きしてたからでしょう」
「いいや、間違いなく貴殿のおかげだよ。君の説得がなければ、魔王は止まらなかった。それに今も、君が魔王の楔になってくれている」
「……ずいぶん直接的な物言いですね」
　今まで対面したときとのギャップに少し戸惑いながら、国王の真意を探る。確かに否定しようのない事実ではあるが、この人がそういったことを口に出してくるのが意外だった。
「すまない、言い方が悪かった。そう警戒しないで頂きたい、別に何か企んでいるわけではない。ただ、一言貴殿に伝えたかっただけなのだ」
　国王は襟を正し、立ち上がって頭を下げた。
「ありがとう。貴殿のおかげで世界は救われた」
「――頭を上げてください、国王。私は別に何もしてないです」
　嘘ではない。本当に何もしていない。私はそこにいただけで、私は話しただけだ。この人に頭を下げられるほどの働きはしていないのだ。
「いいや、貴殿が魔王に戦いをやめるよう働きかけたのは知っている。それがなければ争いは今も続いていただろう」
「そんなの……ただ当然のことを言っただけですよ」

『誰も戦いを望んでいない――もちろん僕も含めて』そう言っただけだ。それで、戦争は終結した。
「誰もがそう言ってきた。それでも止まらなかった。なれば、それは貴殿の力じゃろうて」
「……ありがとうございます、その言葉、素直に受け取っておきます」
そういうと王は、頭を上げて皺の刻まれた顔をくしゃっと歪めた。
「またいつか、別の形で礼をさせて頂きたい。今や魔王の婿となった貴殿が喜ぶような物を授けられるか、少し不安だが」
「私としては、王に感謝の言葉を頂いた時点で十分なんですけれどね……そろそろ彼女の我慢の限界が近いと思うので、今日はもう失礼します」
「うむ、それではまた――いや、最後にもう一つだけ聞きたい。下世話な話で申し訳ないが、ずっと気になっていたことがある。貴殿は如何にして魔王の心を射止めたのだ？」
「――さあ？　物珍しかったから、とかじゃないですかね」
一礼して、セバスが開いたゲートへ向かう。思っていたよりも話し込んでしまった。恐らくルシファルは今頃へそを曲げて、ベッドに寝転がっている。歩きながら、先程の王からの言葉が脳裏にあった。私は世界を救ってなどいない、私はただ――――

約束の半年後と埋め合わせの三分前

「……」
「すみません、お待たせしました」
部屋に戻ると案の定、ルシファルは不機嫌そうな様子で待っていた。帰ってきた私に気づくと唇を尖らせ、ぷいとそっぽを向く。子どもみたいだな、と内心で少し笑ってしまった。
「遅くなってごめんなさい、話が長くなってしまったもので」
「……」
「それにしても今日は色々あって疲れちゃいましたね、さてそろそろ寝ますか！」
「……」
視線と袖口を掴む手が、何かを必死に訴えている。内心で溜息を吐いて、その手を握った。
「ルシファルさんに寂しい思いをさせてしまったので、何か埋め合わせをさせていただきたいのですが」
「あら、そう？」
白々しい、という言葉はすんでのところで飲み込む。けろりと顔色を変えて、ルシファルは笑顔だった。
「一体どんな埋め合わせをしてくださるのかしら？」
「貴女はどんな埋め合わせをお望みで？」
「それはもう、貴方がしてくれる埋め合わせなら何でも嬉しいわ」
何でもいいっていうのが一番の困り物だ。それでいて、外せば文句を言うのだから、最早拷問である。まあこの人ならそんなことはしないだろうが、ある程度上機嫌になってくれそうな『埋め合わせ』をしなければ不味そうだ。さて、どうしたものか。それこそ、読心の魔法が使えればなと思った。
「そうですね……」
悩む私に彼女は期待の眼差しを向ける。それに添える何かをあげられるとは思っていないので、プレッシャーが高まるばかりだ。着想

を得るべく、最近の彼女が一番喜んでいたことが何だったかを考える。
「……ルシファル」
「!?」
一秒置いてルシファルは、驚愕の視線をこちらに向けた。口を開いて三秒固まり、ぷるぷる震えてようやく言葉を発した。
「い、い、今もしかして……」
「どうしたんですか、そんなに動揺して」
「ああ、いえ、もしかして幻聴かしら……あなた、もう一度私の名前を呼んでくださる？」
「ルシファル」
「ああっ!!!!」
ルシファルがベッドにぼすっと大きな音を立てて沈んでいった。次いで、念動力の魔法で枕を引き寄せ、それを潰すように抱きしめ、ゴロゴロと横転を繰り返していく。
「遂にこの日がきたのね……！　しっかりと名前で呼び捨てにしてくれる日が……！」
「ええ……」
予想以上に嬉しそうな反応を見せるルシファルに、内心では結構動揺していた。いや、喜んでくれるのは全然いいのだけれど。『さん』が抜けた程度で大袈裟なのでは。
「つまり初夜の時が……！」
「えっ」
ルシファルは焦る私の手を引き、身体を諸共ベッドへと沈める。そのままくるりと体勢を翻した彼女は、馬乗りになって覆い被さり――そして私の唇を奪った。といっても、本当に少し触れただけだったが。それでも確かに残る感触が、私の脳をじりじりと焼くようだった。一度身体を離した彼女は、赤くなった頬に両手を当て、熱を帯びた瞳でこちらを見つめていた。
「……ごめんなさい、はしたない妻だと思った？」
「……ええ、まあ……」

「でも名前を呼んでくれたってことは、そんな私も受け入れてくれるってことなのよね？」
「……？」
「……もしかして、忘れちゃったの？」
はて、忘れたとは一体。首を傾げかけて、そこで在りし日の約束を思い出す。そう、アレは忘れもしない（忘れてたけど）結婚式の時のこと。教会にて、魔王の癖して神に永遠の愛を誓い、誓約の口づけ。そのあと、何だか四六時中ルシファルの様子がおかしくて聞いてみたところ、どうやら先刻の感触が忘れられないとのこと。要するに求められているのだな、と困った私は、咄嗟に嘘を吐いた。『アレは大事なとき以外にはしてはいけない行為なんですよ。無闇矢鱈にちゅっちゅしていたら、品格を疑われますからね。その重要性や神聖さも損なわれてしまいますし』そう誤魔化すと当然のように、『ならいつならよろしいの？』と聞かれたので、少し困りながら貴女の名前を呼び捨てたときだ、と答えた。そんな在りし日の記憶が蘇ってきて。やってしまったなと内心頭を抱えた。
「ふふ、思い出してくれたみたいね」
「あー……えーっと、はい……」
これ以上重ねられそうな嘘もないので、目を反らしながら頷いた。瞬間、唇に柔らかな感触があった。磁石の異なる面みたいに、吸い寄せられるような不思議な感覚がある。というか実際、吸われていた。身をよじらせて離れようと試みるが、力が抜けて叶わない。嫌だとかそうでないとかそれ以前に、そろそろ息が苦しくなってきて堪らないので肩に手を当てて引き離そうと掴むが、そこにあったのはやけに柔らかな温もり。しかしまあ、「んぅ……!?」と甘い声を漏らしながら彼女が離れてくれたので結果オーライということにしておく。
「はあ、はあ……いくらなんでもいきなりはダメですよ。心の準備も身体の準備もできていないんですから……けほっ」
「ごめんなさい、ようやく貴方と思う存分口付けられるのが嬉しくて……で、でもそれよりも」
私のお腹の上で、ルシファルは頬を紅潮させ、もじもじと肢体をく

ねらせ言った。
「今の……もう一度やってほしいわ……♡」
「……」
やれやれ、どう言いくるめるべきか。とりあえず、今夜の安眠が消えたことだけは静かに確信していた。

朝食とからかいの五秒前

「昨晩はお楽しみでしたね」
　朝餉の完成を告げに来たセバスのその言葉に小さく震えた私だったが、ルシファルは「ええ♪」と大変上機嫌なご様子で笑った。まあこれに関しては、残念ながら何も文句は言えない。何故なら昨晩、ドアは開けっ放しだったからである。途中でそれに気づいて閉めたかったものの、ルシファルがまったく離してくれなかった。そりゃ皮肉の一つもいわれるよな、と思い「何というか、すいません」と小さく頭を下げた。
「いえ、仲睦まじいのは大変よろしいことです。お気になさらず」
　アレを見たのなら仲睦まじいなんて言葉は出ないだろう、なんて愚痴は胸の奥に飲み込んで「どうも」と返しておく。昨夜のアレは最早捕食に近かった。肉食獣と草食動物との関係性に近いソレであった。ちゅっちゅちゅっちゅと酸欠になりそうな程口内を貪られる地獄。ルシファルが口紅を塗るような女性だったなら、私の顔はさぞかし大変なことになっていただろう。不幸中の幸いである。毎晩こんな夜を過ごしていたらとてもじゃないが体が持たないので、早いところ彼女を説得して丸め込まないといけないな、と小さく嘆息した。
「こちらへどうぞ」
「ありがとうございます」
　恭しく頭を垂れたセバスの脇、開かれたゲートを潜る。朝食はビュッフェ形式なようで、会場は既に多くの客で静かに賑わっていた。上流層特有のこうした品のいい雰囲気は、嫌いじゃなかった。
「ルシファルさん、何か食べたいものはあります？」
「貴方と一緒なら何でもいいわ」
「強いて言うなら、貴方の食べたいものかしら」――そう笑って、彼女は体を密着させるように腕を絡めてくる。今私の食べたいものとなると、果物オンリーになってしまうがよろしいのだろうか。よろしいのだろうなあ。しかしそれでは彼女の栄養バランスが偏ってしまう恐れがあるので、満遍なく料理を盛り付けていく。

「やあ、おはよう友よ！」
　気さくな挨拶に空いた片手で応えて、そのまま盛り付けを続ける。朝から羨ましいくらいに元気な奴だ。
「昨晩はお楽しみだったね！」
「!?」
　思わず盛りつけたフルーツを落としかけたが、寸でのところで留まった。何故だ、何故知っている。
「ハハハ、ドアが開け放たれていたじゃないか。アレじゃあ隠せるものも隠せまい。そもそも昨夜はお隣さんだったからね」
「は――!?」
「ああ、勘違いしないでくれ。盗み聞きしようなんてつもりはなかったんだ、手洗に行く時にたまたま耳にしただけで。流石王宮の賓客室、防音性はバッチリだった。扉を閉めた時に確かめたから間違いない!!」
「……」
「ハハ、どうした友よ。なんだその視線は、敵意と悪意に溢れ返る社交界に生きる俺でも、親友からの冷たい目には傷つくんだぞ？」
「何故その親友を助けてくれなかったのかを追求したいんだけど」
「それはもう、お楽しみだったからとしか」
　一発殴った。グーで。社交界にあるまじき行為だろうが何だろうが、魔王の夫には関係ない。「いっ――――!?」と瞳に涙を浮かべる光己を後目に、フルーツ盛りを再開した。
「いやいや、馬鹿にしてるわけじゃないんだよ。幸せなことじゃないか、あんなに求められるなんて」
「それ以上喋ったら間違いなく国際問題に発展するから、そのつもりで」
　フォークを向けながらそういうと、「……すまない」と光己素直に頭を下げた。まあ悪気がないのはわかってるので、冗談である。
「お前約束の話、忘れてるだろ」
「もちろん覚えているとも。『我が友とルシファル嬢の、性的関係には一切触れない』だろう？　いくらなんでもデリケートすぎると思っ

て、一秒たりとも忘れたことはない！」
「デリケートな訳じゃないんだよ、自己防衛の一種なんだよ。もしそんな展開になったらその……多分死ぬしかなくなるから……」
「え、そんなに重いのかい!?　愛が!?」
「まあ……そんなところだよ」
　夫婦ってのも難しいものだねえ、と難しそうな顔をしながら、ビュッフェの果物を素手で摘む光己。品がない、というか衛生的観点から見てもよろしくない。お里が知れるぞ。
「あら、十文字の」
「おはようございますルシファル嬢。高貴な光己です」
　私を待ちかねたのか、ルシファルがやってきた。というか光己のその自己紹介は恥ずかしくないのだろうか。まさかそれを定着させていくつもりなのだろうか。だとしたら友人関係の解消も吝かではないのだけれど。
「何やら嬉しそうな様子だね！」
「ふふ、わかる？」
　光己でなくともわかる。見た目からして既に、今日のルシファルは浮かれまくっている。普通の魔王はビュッフェ会場でスキップしないし、普通の魔王は鼻歌を歌いながら夫に近づいてこない。
「昨日はとっても嬉しいことがあったから……ね、ア・ナ・タ？」
「あー、まあ……そうだね、ルシファル」
　これみよがしなウィンクから只管目を背ける。無心になるのだ、一度目を合わせてしまえば間違いなく誤魔化せない。
「おっと失礼、どうやら俺はおじゃま虫なようだな？」
「ええ」
「ハッハッハ、そこまでハッキリ言われては仕様がない！　俺はそろそろ行くとしよう。それじゃあまたな、友よ。また連絡する！」
　高価そうなマントを翻して、光己は去っていった。騒がしいやつである、だからだろうか、別れた後に少しだけ寂寥の感があるのは。
「さてと、それじゃあ朝食をいただきましょう？」
「ええ」

帰宅と観察の二分前

「おまたせ、グレラくん」
　朝食を終え、此度の懇親会は解散の運びとなった。なのでグレラ君に連絡をして、例のデッドスペースまで来てもらった次第である。
「いえ、お勤めご苦労様でしたっす魔夫さま！」
　恭しく敬礼のポーズを取る彼を見て苦笑する。高身長でスタイルのいい彼にそういう姿勢を取られると、どうにもちぐはぐな構図になって気まずい。
「楽しまれたようで何よりです!!」
「う、うん」
　朝から散々かけられてきた単語の到来に思うところがあったが、流石に含意はないはずなので流す。
「直で城まで帰るルートでよろしいっすか??」
「ああ。もう寄るところはないですよね、ルシファル？」
「……」
　そう聞くと、彼女は胸元から取り出した二枚のチケットで口元を隠し、期待の眼差しをこちらに向けた。動物園とプラネタリウムのチケットである。
「また今度にしません？　昨日の疲れが残ってますし」
「でも折角ここまで来たのよ？」
「そこまで遠い場所でもありませんし、日を改めた方がいいですよ。それにほら、昨日水族館で買った子達を料理してあげないと不味いじゃないですか」
「あら、そういえばそうね。美味しく料理してあげないと」
　妖しげにルシファルが笑うと、トランクがガタガタと震えた。このやり取りは中々面白いので、大して美味しくも無いだろう料理に使ってしまうのは勿体ないかもしれない、と少しだけ思った。まあ彼女がやる気なら、止める気はないが。
「ということで、城まで直で頼むよ」
「了解しましたぁ!!　面舵いっぱい!!」

「船でも運転する気かい？」
謎の掛け声と共に車は動き出す。視線に気づいてそちらを向くと、大理石のテーブルに両手で頬杖をついたルシファルが、慈しむような目でこちらを見つめていた。
「どうかしました？」
「いえ、貴方が活き活きしているように見えたものだから嬉しくて」
「そうですかね」
「ええ。十文字の彼と話してる時もそうだけれど、貴方の素が出てる時が一番素敵だわ」
瞳は、品定めするような暗い色を孕んで見えた。
「そう見えます？　気になる異性の前では、男はついカッコつけちゃうんですよ」
「うふふ、嬉しい。どちらの貴方も素敵ですわ」
広い車内だっていうのに、勿体ないことにその余剰スペースをまったく活用せず、彼女は私の腕にまとわりつく。恐らく、到着するまで離れてはくれない。そのくらいは、二つのデートプランを我慢してもらった代償として、受け入れざるを得ないだろう。そう思った。

報告と邂逅の三秒前

「魔王様ぁぁぁぁぁ！　お帰りなさいませぇぇぇぇぇ!!」
「なんでいるんですか」
　私たちを出迎えたのはザラキアだった。相変わらず騒がしい人である。
「婿め、私は魔王様の配下たる四地王ぞ？　故にこの城にいようが何の問題も――」
「五月蝿いから用がないなら帰ってもらっていいかしら？」
「申し訳ございません魔王様！　要件が済み次第速攻で視界から消え失せますのでッ!!!」
「手短にお願いね」
　ルシファルは淡々と言った。多分、長いと判断した瞬間に放って帰ると思う。それにしても、彼がアポなしでここを訪れるのは珍しいな、と思った。
「ルーティが動き出したようです」
「――なるほど、あの子がね」
　面白い玩具を見つけたみたいにルシファルはニヤリと笑った。自分で言うのも何だが、私のこと以外でそういう反応をする彼女は珍しい。

　――ルーティ＝ネクルマアサ。ルシファルの親衛隊――もとい側近舞台、四地王の一人。第一級の呪術師。生と死の理を壊す霊媒術を得意とする。その力は凄まじく、数万人の骸を同時に操るその能力は、一人で最新鋭の軍隊一つに匹敵するかそれ以上の力を発揮する。ただ、そんな彼女には問題があり――
「あの引きこもりが動き出すとは、ね」
　――そう、引きこもり。引っ込み思案で引き気味で常に引き笑いを浮かべるような根暗女が彼女である。人見知りで人嫌いな彼女が動く理由があるとすれば、それはもう一つしかない。

「何の用かしら」
心底楽しそうな声音で、ルシファルは呟いた。

「ルーティは現在、ここから３００キロメートルほど北西に離れた”毒の沼地”付近の館でひっそりと暮らしています」
「いい立地ね」
「はい。ですが、ここ数日は近辺での彼女自身の目撃情報はなく、代わりに骸の群れの行進情報が確認されております。村などを避けた迂回ルートのようなので被害などはありませんが、何せ数が数なので場所は筒抜けです！　現在我が領地付近を抜け、魔王城に向かってきておりますッ！」
なるほど、やはり目的はルシファルのようだ。しかし動機はなんだろう。まさか反乱などではあるまいが。
「ふうん。それなら、迎えに行きましょうか」
パチンっ!!　と指を弾くと共に、高純度の魔力がバチバチと弾けた。
「骸の姫の元へ運べ、転移（エスケープ）」
詠唱とともに魔力が私たち三人を包んだ。強い光に思わず目を瞑る。耳がキーンとする感覚と共に、風が頬を撫でた。目を開ければそこはもう、だだっ広い緑の平原だった。ひとつ異常があるとすれば、我々はのどかな気候に相応しくない骸たちに囲まれている。

「貴様ら道を空けい！　ルーティはどこだ!?」
「傀儡でしかない骸に問いかけても意味はないのでは……？」
「五月蠅い、貴様は黙っていろッ！」
なるほど、その喧しさなら容易に伝わるか。という言葉は寸でのところで飲み込んだ。実際に意思が通じたのかは定かではないが、骸による包囲陣の一角が開いた。ずしんずしんと大きな足音が、大地を震わせ、段々とこちらに近づいてくる。見遣れば、５メートルほどもある巨人の肩に、小さな少女が座っていた。骸たちは皆彼女に傅き、恭しく頭を垂れる。
「久しぶりね――ルーティ」
六芒星の刻まれた、闇のように黒いローブ。その下から青白い肌と、蒼髪と、赤い瞳を覗かせたルーティは、大きく口角を吊り上げて――ルシファルに飛びかかった。

幸福と決裂の一秒前

「まおううううう、ひさしぶりいいいいいいいいい!!!」
「こらこら、はしゃがないの」
その小柄な体躯を目いっぱい広げて、彼女はルシファルに抱きついた。「よしよし」と頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細める。子どもっぽいというか、ペットっぽいというか。辺りの風景に反比例して牧歌的なその光景を見てか、ザラキアが「尊い……」と呟いたが聞かなかったことにした。
「それで、今日は何の用事で来たの?」
「まおうにあいたかったから!」
「あら、それだけ?」
「え、そそそそれだけって言われてもあたしの友達なんてまおうくらいしかいないしそれだって頻繁に会えるわけじゃないから今回だって毎日会いたいのをがまんして二年ぶりくらいに来たわけだしあたしの日々のがまんをそれだけって一言で片づけられちゃうのはどうにも悲しいっていうか泣いちゃいそうっていうかごめんちょっと涙出てきた………」
「はいはい、ごめんなさいね」
「きゅう………」
ルシファルがどこからか取り出したハンカチでルーティの目元を拭くと、とろんとした表情になって再び抱きついた。面倒なところも多いが、ルシファルに対する彼女は基本的に甘えん坊である。どちらかと言えば姉と妹か、もっといえば母と娘の関係性に近い。
「……こほん」
「ひっ、ザラキア……いたんだ……」
彼の姿を見て、ルーティは彼女の後ろに隠れる。同じ四地王であろうと、ルシファル以外は苦手らしいのだ。
「貴様の骸の群れの行進が五月蝿いだの怖いだのと、近隣住民から苦情が入っている。もうちょっとどうにかならんのか?」
「だ、だって……周りにみんながいないと怖くてうごけなくなっちゃ

うし……」
「そうは言っても限度があるだろう。あと一回り二回り、いや十回りくらい規模を減らせんか？」
「そ、そこまで減らしちゃうと……なんかあった時……死んじゃう……」
　厳選した骸を連れた彼女に『何かある』とすれば、それはこの国の危機と言っても過言では無いので、死ぬ事はないだろうと思って、ほんの少しだけ、笑い声を漏らしてしまった。しかし彼女の敏感な耳にはそれで十分だったようで、
「……！」
　血相を変え、ルーティは鋭い瞳でこちらを睨む。込められているのは明らかに殺気だった。これにはいくらなんでも二人とも反応し、即座に警戒の体制をとる。
「……ルーティ、どういうつもりかしら？」
「どどどどういうつもりって言われても……まおう、そいつが来てからおかしいよ。ちょっとのことに敏感になったり、話し方だとか、あたしたちへの態度まで変えたり……おかしいよね、ザ、ザラキア？」
「……まあ、それについては異論がない」
　ザラキアも、冷たい目でこちらを見る。庇うようにルシファルが前に出た。
「――貴様ら、我が伴侶が気に食わないというのか？」
「う、うん。目をさましてよ、まおう！　あのころみたいにさ、骸の山を築こうよ！」
「……ザラキア、貴様もか？」
「――ルーティよ」
　ザラキアは、ゆっくりと体を翻した。黒いマントをたなびかせ、ルーティを見遣る。
「確かに婿は気に食わん。殺したいほど気に食わん。此奴のせいで魔王様は腑抜けてしまわれた」
「ね、そうでしょ!?」

「だが、悪いことばかりではない。世界は平和になった。領地は豊かになった。人の技術で、生活は格段に向上した。そして、何より今、魔王様は幸せだ」
「……ほう」
　見なくともわかる。ルシファルは、魔王の名に相応しい、凄惨な笑みを浮かべた。
「そ、そんなのどうでもいいよ……だってあたしはいま、なにも面白くない……おまえのせいだ、全部おまえの」
　――刹那、心臓が急速に鼓動を早める。呪術師たる彼女の言葉は、文字通り呪いだ。心臓にかかる負荷は、しかしルシファルが飛ばした威圧の波動によって吹き飛んだ。息を荒らげる。呼吸が辛くなる。
「貴様――死にたいのか？」
「ヒッ……!?　だ、だってまおうはそいつのせいで――」
「お待ちください、魔王様」
　今にも始まりそうな争いを、紙一重で沈めたのはザラキアだった。
「奴は今、婿を否定しました。魔王様の幸福を否定しました。しかし同時に――私の幸せをも、否定しました」
「ならばどうする？　ザラキアよ」
「決まっております、魔王様。このわからず屋を武力でわからせる」
　そういうとザラキアの周りに、轟音と共に無数の武器が飛来した。素人目にも、それらが歴戦の武具であることは瞭然だった。
「いいよ……だったら！　おまえを殺して！　むこも殺す!!」
「やれるものならやってみろ――四地王同士、とことん殺り合おうではないかッ！」
　――骸の群れは、一斉に進行を始めた。

開戦の一秒前

まず動いたのはザラキアだった。

「シャアァ！」

掛け声とともに、右手で巨大な槍を空に放り投げた。槍はその先端を点のように幾重にも広げ、隙間だらけの傘のような形状になり、そこから光線を放出した。

「うえっ……」

光線は骸の群れたちへと降り注ぐ。紙一重で逃れるもの、体の一部を犠牲に堪えるもの、そもそも効かない様子の強者などもいたが、この一撃で群れの大半は土に還った。骸故、光魔法には基本的に相性が悪い。ルーティは骸の巨人の陰に隠れ、攻撃を凌いだようだったが、陣営の崩れた骸たちへ向けて、ザラキアは大剣を片手に駆け出した。

「オオオオオオ!!!」

自身の身の丈程もある大剣を軽々と振り回し、ザラキアは次々と骸を両断していく。これだけの大火力を放った以上、魔力の消耗は相当なものだと思われるが、それを物ともしないような暴れっぷりである。「すごい……」と思わず声を漏らす。背後のルシファルが「そうね」と少し誇らしげに頷いた。

「ザラキアとの初戦の際、最初にやり合ったのはルーティだったそうなんだけど、この猛攻に攻め切られて危ないところだったらしいわ。途中でローザが合流して以降はボロボロだったみたいだけど」

「へえ、そうなんですね」

流石に地上で見守るのは邪魔だし危ないので、私は今ルシファルに抱えられえ上空に浮かんでいる。「さて、どうなるかしら」と楽しそうに呟く声を聞いて、再び戦場を見下ろした。

「よ、よよよくも我が友たちを屠り回ってくれたなザラキア……！」

「ふん、貴様の友だというのなら、こんな土塊のような脆さではなく、もっと強度を鍛えてやるといい」

「そうさせてもらうぞ！　骸よ、先達に続け……！」

宣言とともに、一人の腰の曲がった骸が、天へと腕を掲げる。つら

れたように全骸がそうすると、ルーティから漏れ出た魔力が、彼女らの元へと流れた。
「感覚共有の呪術ね」
「一体何ですか、それは」
「文字通り術者の感覚を対象者に共有させる呪術なのだけれど、ルーティはそれを各感覚ごとに共有することで、軍全体に強化をかけられるのよ」
――なるほど、よくわからん。
「たとえばそうね、今行ったのは恐らく耐性の共有。素体は聖人の骸っぽかったから、光魔法と熱魔法辺りへの耐性を底上げしたんじゃない？」
ぐおおお、という呻き声とともに、今度は巨人が腕を掲げた。そこから黒い魔力が漏れ出で、軍全体に割り振られると、亡者たちは一斉にザラキアへ襲い掛かる。その勢いは先程までより俊敏で、力強い。
「今のは身体能力の共有ね、結局は元のスペックに依存するとはいえ、短期的な強化としては恐ろしい火力を誇るらしいわ」
素人目にも、瞬発力が数倍に膨れ上がったのが伝わってきたレベルである。相手にするとなればそれはもう、地獄のような軍勢だろう。そこから蘇った傀儡なのだから当たり前か。
「ぬんッ!!」
得物を薙刀に持ち替えて応戦するザラキアだったが、徐々に押されつつあるように見えた。体力と魔力を同時に奪われていくザラキアに対し、ルーティは骸を一定間隔でぶつけていくだけでいい。その差がそのまま戦局に繋がってきているらしい。
「どどどうだザラキア！　今こうさんするなら、まだ許してやらんでもないでもない!?」
それは許さないのではないか、とツッコみたかったが、何か言われると怖いのでやめた。
「遠慮しておこう、ルーティ。我は、魔王様以外に頭を下げる気はないんでね……！」
そういうと大槍を片手に、ザラキアは天高く飛翔し、相手を失った

骸たちは腐った頭蓋をぶつけあった。漆黒の翼を大きく広げ、ザラキアは詠唱を始めた。

「闇夜よ、地を這う愚者どもを無に帰せ――漆黒の帳（ダーク・フォールン）！」

どす黒く染まった槍は――戦場の中心を穿った。

決着の三分後

「どうなった……!?」

砂埃が晴れる。気づけば山のようにいた骸の姿はどこにもなくて、残っていたのは円形に削り取られた地形、クレーターと、両膝をつくルーティ。そして彼女に槍を向けるザラキアの姿だった。

「終わりだ、ルーティ。これ以上は不要な苦しみを生むだけだ」

「うっ……」

フードを目深に被り、ルーティは俯く。

「さあ、魔王様と我に詫びろ。あとついでに婿にもだ」

「ううっ……！」

何かをこらえるようにルーティは頭を抱えた。その様子を怪訝そうに見つめるザラキアだったが、突如響いてきた爆音に思わず体を引いた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁん、ザ、ザラキアなんかに負けちゃったぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」

「あらあら」

ルシファルは困ったように声を漏らしたが、私とザラキアはそれどころじゃない。あの人見知りの小さな体躯のどこにこんな声量が隠れていたのか、疑問しかない。頭の奥でガンガンと反響するのを堪えて音源地を確認すると、「な、なんかにとはなんだ!!!!!!!!」と必死に叫ぶ彼の姿があった。声量も迫力も微塵も追いついていないので、どちらかと言えばザラキアの方が負けてるみたいだったが。

「だ、だって……ザラキアに負けるって、格下に負けたみたいでなんだかすごく悔しいから……」

「なんで我の評価がそんなに低いのだ!?　同じ四地王だから同格だろう!?」

「でも後輩だし……『奴は四地王の中でも最弱！』って言われそうなポジションだし……」

「なんだその認識はァ!?　我が王よ、この不埒物に何か言ってくださいませッ!!」

「わかるわ、ルーティ」
「だ、だよね!!」
「魔王様ァァァァァァァァァァ!?!?」
感慨深そうに頷くルシファルに、ザラキアが思わず叫んだ。そんな姿を見て、ルーティは「ふ、ふひひ……!」と、堪えたような笑い声を漏らす。同時に、何かに気づいたようにこちらに視線を向けた。
「まおう……と、婿。その……ごめんなさい」
「私は別にいいわ。この人を侮辱されたことに怒ってただけだから。だから、貴方が許すかどうか。それだけよ」
三人の目がこちらに向く。勘弁してくれ、そんな思いを込めながら嘆息した。彼女の怒りはもっともなんだから。
「許すも何も、私も微塵も怒っていないので……大丈夫です。むしろ、私のせいで全員に迷惑かけちゃって、ごめんなさい」
「い、いや……私こそ」
お互いにいそいそとお辞儀をした。ルシファルがパン、と手を叩いて「これで一件落着ね」と微笑んだ。
「さて、みんなでご飯にでもしましょうか？　いい魚があるのよ」
「それはよいですな！　ご相伴に預からせてくださいませ！」
「まおうのごはん……たのしみ！」
「魚ってもしかして……」
脳裏に先日の、魔界の珍魚たちの姿が浮かんだ。嫌な予感を少しだけ抱えながらも、とりあえず黙っておいた。

共感の七分前、傍観の二年後

「ふう……」

分厚い背表紙を閉じ、紅葉の隣に置く。目を閉じて思い浮かべるのは先程の情景。

「よかった……今回も……」

読了後の何とも言い難いこの達成感というか爽快感が、たまらなく好きだ。物語の世界から離れて現実に戻ってきたが故に、その良さが増して感じられるような、作品との間にか細い糸が繋がってるような、そんな感覚。同時に、次巻への期待ともどかしさも生まれるが。

今読んでいたのは最近巷で話題のファンタジー小説である。王道をいくようなバトル展開だけでなく、秀逸なコメディや濃密な恋愛描写にも定評があり、老若男女問わず人気となっている。そして私はこの作者のデビュー作から読んでいたので、古参として少しだけ鼻が高い。

「秋だなあ……」

頭上の紅葉の隙間から、優しく木漏れ日が射している。少し遠くを見れば金色のイチョウがザワザワと揺れているし、仄かに銀杏の香りもする。これがかつて人間から『落命の地』と呼ばれていた魔王城の一角とは、とてもじゃないが思えない。いい場所である。今日はルシファルも会議で外しているので、思う存分羽を伸ばしているのだ。風の音と鳥の鳴き声しか聞こえない、静かな昼下がり。贅沢な時間である。

「まふさままふさままふさまー!!」

贅沢と静寂を打ち砕く声が聞こえた。声の方に目をやると、笑顔のグレラくんがこちらへと特攻してきている。ブンブンと手を振っているので、軽く振り返してみる。

「ご一緒していいっすか!?」

「あーうん、大丈夫です」

頷くとグレラくんは隣に腰かけた。近いよ。距離感が。別にいいんだけど。

「というかグレラくん、今会議中じゃなかったっけ？」
「魔王様に退出を命じられたので抜けてきました！」
「ええ……？」
　何をやらかしたんだろう。
「『貴方を見てるとどうにも、考える気が削がれるわ』って仰ってたっす！」
「わかるなあ……」
　こればかりは嫁に同意だった。や、別に目の前の彼への悪口ではない。それも一つの長所であり、少なくとも私は魅力だと思う。
「まぁとりあえず、お茶でもどうぞ」
「ご相伴に預かります！」
　勢いよく敬礼のポーズをとるグレラくんに苦笑しながら、紅茶を注ぐ。特注の魔陶器に入っているため、淹れてから数時間経っているのに温かい。
「ぷはー、美味いっすね！　なんかすげーいい香りします！」
「それはよかった。茶葉はちょっと拘ってるからね」
「おかわりお願いしてもいいっすか！」
「いや、それは別にいいんだけど。水でも飲むようなペースで流し込んでるね君」
　あまり口うるさいことは言いたくないが、紅茶は香りと味を楽しみながらのんびり飲むものでは……？　まあ、それが好きなら否定はできないけれど。
　そんなことをやんわりと伝えた。
「そういうものなんすねえ……次からは気をつけます！」
「いや、まあそんなに気にしなくていいよ。その方が美味しいんじゃないかなーっていう私の好みに過ぎないからさ。好きなように飲むのが一番ですよ」
「いえいえ、魔夫さまが言うなら間違いないっすよ。すみません、俺、何にも知らないもんで」
　常に明るい様子だった彼の表情に、少しだけ影が差した。それを誤魔化すように彼は悲しく微笑んだ。

「何かあるなら、聞くよ？　話したくないことなら大丈夫だけど」
髪を少しだけかいて、彼は重々しく口を開いた。
「……その、本当は俺、こんなところにいられる人間じゃないんす。生まれは貧民だし、大した知識も教養もないし。能力を買われて今はここに置いてもらえてますけど、実際大したことしてないし……」
「グレラくん……」
呆れたように、大きく息を吐いた。
「そんなこと気にすんな！　私だって孤児だった、でも今はここにいる。そしているからには、自分にできることをするだけだろう。間違ったって学べばいいさ。私なんて、未だにテーブルマナーもままならないよ」
「魔夫さま……そうっすよね！　俺も、魔夫様みたいに頑張ってみるっす！」
「うん、その意気だ」
大したことは言えなかったけれど、グレラくんのなかで何か軽くなるものがあったのなら何よりである。それにしても、彼も貧民の出だったのか。最近はマシになったとはいえ、官僚の上層部なんてほとんど貴族社会みたいなものである。そんなところに似た境遇の人がいるというのは、少しばかりシンパシーを覚えた。
「だから土とか食ってたのか……」
「や、あれは単純にここの土が美味いだけっす！」
「偏食家すぎるでしょうが」
無邪気に笑うグレラくんに思わず苦笑した。笑ってる時の彼はいい意味で子どもっぽくて好きなんだけれど、そういえば歳はいくつなのだろう。
「今年で……２８っすね！」
「えっ、本当ですか」
思わず敬語になってしまった。元服しているのはわかるけれど、そこまで歳が離れているとは思わなかった。偉そうに説教じみたことをしたのが、なんだか恥ずかしくなってきた。
「あっ、年齢なんて別に気にしなくて大丈夫っすよ！　魔夫さまの方

が格上っすし、何より尊敬してるんで!!」
「それじゃあお言葉に甘えさせてもらおう」
「魔夫さま！　もうひとつ聞いてもいいですか？」
「私に答えられることなら、どうぞ」
「失礼を承知でお聞きするっすけど、今の魔夫さまの立場は魔王さまあってのものじゃないですか」
「そうだね」
　肯定する。それは事実でしかないし、それに甘んじている以上、否定するような不快な現実でもない。
「魔王さまはかなり強引に魔夫さまとの婚姻を進めて、一時は魔夫さまから片時も離れないようにするために、王の座を退こうとしたとも聞いたことがあるっす。そんな魔王さまと魔夫さまは、一体どこで出会ったんすか？」
「……それは」
　言い淀む。真っ赤に染まる街、折れた花束、瓦礫の山。その頂点に立つ、暗い瞳の銀髪の女。その腕の中の――――
「あ――――な――――ーた――――!!!」
　束の間の静寂を打ち破る、死ぬほど喧しい声が響いた。やれやれと嘆息し、グレラくんに「また今度ね」と囁いてあちらへ向かう。夫婦の間に挟んで気まずくする訳にはいくまい。気づけば日は傾き、燃えるような西陽が差し込んできていた。

相談と商談の二分前

からんからん、と玄関のベルが鳴った。
「私が出ます」
王自らに客人を迎えさせるわけには行かない。立ち上がりかけたルシファルさんを諌めて、そちらへ向かう。龍の装飾が施された小洒落た扉を開けると、爽やかな笑顔の貴公子がいた。
「やあ友よ！　久しぶり！　君の親友、高貴なこ」
とりあえず扉を閉めた。途端何も聞こえなくなったので、いい扉だけあって防音性に優れているんだなと感心する。開き直す。
「……十文字家十代目継承候補、十文字光己です。魔王殿の小耳に入れたい話があって参上した次第です」
「お待ちしておりました、十文字様。お入りくださいませ」
「ありがとうございます……ってやっぱりコレ、気持ち悪い！　友なんだから固い言葉使わなくてもよくない!?」
「いやでも、商談の場だし。っていうかお互い立場があるし」
ちらりと光己の背後を見遣る。ガタイのいい黒服さんたちが五人並んでいる。目に見えているのがその人数ってだけで、今この城には護衛の方々が無数にいるはずである。つまり下手なことが出来ないのだ。多分、軽いボディタッチでも怒られる。
「お互い大人になってしまったということか……悲しいね、友」
「まあ、そうだね。悲しみを胸にしてそろそろ本題に移ろうか」
部屋の中に招き、来客用の大きなソファに座ってもらう。ルシファルがお茶を運んできたところで、「で、私たちの大事な時間を奪うに足るお話って何かしら？」と例の如く圧たっぷりの視線を飛ばした。それに物怖じすることもなく「ある金脈の話です」と微笑む。
「魔王城から南東、数百キロのところに鉱山が存在していますよね」
「ああ、ベレスタ鉱山ね」
ベレスタ鉱山は有数の採掘地であり、国のレアメタルの二割はここで掘られたものというレベルの規模の場所である。古い魔族の領土であり、漏れ出た膨大な魔力が固まったことで生まれた鉱石が多い。

大して有名な場所ではないが、かといって別に秘匿されているわけでもない、普通の土地である。あの場所がどうしたというのだ、と聞いてみる。
「や、本題はあそこじゃない。でも関係はあるんだ。王よ、ベレスタ鉱山が生まれた理由は知っていますよね？」
「知らないわ」
「魔族内の戦争で多くの魔力が漏れ、魔力の源たる血が流れ、石の核となる有機物が山のように積もったからです」
　魔力という流動的なエネルギーは、決まった形を取りたがる。人や魔族の体内にある時は、形の中にあるが故に純粋な力として機能する。だが魔法や魔道具などで使用して空気中に漏れた魔力は、新たな形を求めて、植物などに取りついて魔法生物になったり、単体でモンスターになったり、有機物に取りついて魔石になったりする。つまりまあ、そういうことだ。
「同じ論理で、多数の鉱石を内包してるんじゃないかと目してる場所がある。けれどその立地がよくない、故にお二人の協力を仰ぎにきたのです」
「鉱石ねえ。どうしましょう、アナタ？」
「利益云々は置いといて、埋まったままなのは勿体ないから掘り出したいよな」
「うん、友ならそう言ってくれると思っていたよ！　で、その場所なんだけど――」
　ベレスタ鉱山から、更に東に数十キロ。そこに、ある悪魔の食事場と食い散らかしがある。
「ロザーズ・キャッスル、そこに恐らく無数の魔石がある」
「ローザのお城ね、なるほど」
　四地王の中でもキワモノたる彼女との交渉、一筋縄ではいかないだろうと嘆息した。

拒否と対話の八分前

「はい、到着しましたわ」
例のごとく転移魔法でひとっ飛び、ロザーズ・キャッスルに到達である。眼前に広がるのは小さな城下町――だったものの残骸だ。石造りの街並みには無数の蔦が絡み、一部の家屋は最早瓦礫の塊。かつての栄華は見る影もなし、といった印象を受ける。
「私は詳しく知らないんだけど、ここって一体どうしてこうなったんだっけ？」
「内乱だよ、兵の抑圧と民の反発の結果、この街は終わったのさ」
「なるほど、それだけ聞くと割とよくある話だけど――」
「そう、それに一枚噛んだ悪魔がいた」
「悪魔じゃないわ、吸血鬼よ♡」
「そう、吸血鬼の――え？」
得意顔だった光己は、間抜けな声と阿呆面を晒した。その背後にはいつの間にか、妖艶な女が立っている。
胸元の大きく開いたボンテージスーツに身を包み、全身をほとんど露出したその格好は、吸血鬼というよりはほとんどサキュバスを連想させる。
鋭く尖った八重歯を覗かせ、淡いグラデーションの入った、ショッキングピンクのツインテールを揺らして笑う。
「おひさ、ルシファルちゃん♡」
「そうね、久しぶり――ローザ」
四地王の一角、ローザ・アルベルフォンは、魔王に向けてぱちりとウインクした。

＊

「狭いところだけど、適当に座って～？」
「ええ、ありがとう」
彼女に連れられてやってきたのは街のシンボルマーク、廃城の中心

――玉座。といってもマクロニア城や魔王城のような、皆が思い描くような物からはかけ離れている。玉座の前には、宝石の散りばめられた豪勢なテーブルが置かれ、部屋自体が小さな女の子のソレのようにファンシーに飾り付けられている。玉座それ自体の存在と、壁にかけられた宗教的な絵画が、部屋のノイズとなり辛うじて原型の存在を主張している。モフモフのぬいぐるみとかピンクのカーテンとか、自分で集めたのだろうか。集めたのだろうなあ。

「ねえアンタ、今失礼なこと考えたでしょう？」

「いやいや、とんでもない！　最高にキュートな部屋じゃないか!!」

ローザからの疑いに、目を輝かせて答えたのは光己。そういえばこいつは意外とカワイイもの好きだった。その言葉を聞いて彼女は少し引き気味に、「そ、そう？　意外と見る目あるわね」と反応した。まあ、私への疑いが逸れたのならそれでいい。

「で、ルシファルちゃん？　いい男二人侍らせて、一体何の用？♡」

「用があるのは私じゃなくてこの男よ、私たちはただの付き添い」

ねえ？　と可愛く小首を傾げて、腕を絡められる。小さく頷くと、彼女は頬杖をついて、欠伸を一つしてから言った。

「ふうん、まあいいわ。話くらいは聞いてあげる♡」

「ありがとう！　実はこういう話があってだね――――」

説明を終え、採掘させてほしい旨を伝える光己。ローザは特に悩む様子もなく、「別にいいんだけど――それ、アタシに何か得ある？」と品定めするようにこちらを窺う。

「君の領地を漁らせてもらうわけだから、相応の見返りは提供するよ！　何か欲しいものはあるかい？」

「私が欲しいものはねえ――もう全部ルシファルちゃんにもらったからいらないの」

「あら、何かあげたかしら？」

「私がもらったのは、平穏♡」

ローザが手を叩くと、壁も天井も霧散し、西日の差す城下町が一望できるようになる。廃墟街（ゴーストタウン）は酷く静かで、鳥の鳴き声すら聞こえてくることはない。

「戦いと人間関係に疲れたアタシに、落ち着ける場所と立場をくれた。だからアタシは、めっちゃルシファルちゃんに感謝してるの♡」
「その程度、あげたうちにも入りませんわ」
　仲睦まじく笑いあう二人。ルシファルと女の四地王は、とてつもなく仲がいい傾向にある。男性陣とは真逆である。
「安心してほしい、防音魔法や光学迷彩を駆使して最大限静かに掘るよ」
「イヤよ。どうせわかっちゃうし、何より自分の体を這いまわられてるみたいで気持ち悪ーい♡」
「弱ったなあ、交渉決裂ってことかい？」
「残念ながらそういうことになっちゃうカナー？」
　ふむ、と光己は少しだけ考え込むが、すぐに顔を上げて「わかった」と頷く。
「どうやら暖簾に腕押しみたいだ、俺からの交渉は諦めよう！」
「それがいいわ、お利口さん♡」
「ということで頼んだ、友よ！」
「えっ」
　肩を叩かれる私。いくら頼まれたところで私にできることなんてない。そもそも、友人のよしみがあるとはいえ、光己の商談を手伝うメリットが――
（……いや、それはないこともないのか）
「お婿くん？　確かに貴方よりは話せる相手だけれど、アタシの意思は変わらないわよ？　ま、奥さんに泣きつかれたりしたら、流石にちょっと困っちゃうけどね」
「我が友にそんな卑怯な真似はさせないさ、ただちょっとお話すればそれで済む」
「へえ、じゃあちょっとお話してみましょうか？♡」
　ちろりと舌なめずりするローザと目が合った。獲物を見るような眼差しである。やれやれ、と嘆息する。
　ローザはその実力よりも、権力者を手玉にとっての謀略の方で有名

だった魔族である。人魔老若男女関係なくその懐に潜り込み、一度目をつけられれば骨抜きにされ、搾り尽くされ捨てられるとかなんとか。さて、そんな人と話すことがあるのかどうか。
「大丈夫？　緊張してない？♡」
「ああいえ、別に大丈夫です。お気になさらず」
「そんなこといって、ほら……ここはこんなに硬くなってる♡」
　肩を触られ、ぐにぐにと慣れた手つきで揉みほぐされる。やけに密着しているが多分マッサージである。どうも、と会釈して離れる。
「つれない反応ね、お姉さん寂しくなっちゃう♡」
　お姉さん……？　と少しだけ首を傾げかけたが、視線が突き刺さってきたのでやめておく。
「お婿くん、何か趣味とかはあるの？」
　露骨に世間話チックな質問だった。色仕掛けによる籠絡が通じないと察されたからだろうか、それとももう私と話すのに飽きたのだろうか。
「そうですね……お茶を入れることですかね、あと読書かな？」
「読書、いいわね」
　帰ってきた一言は、なんだか無駄に作っていないというか、飾り気のない色を帯びて見えた。
「ローザさんも、本を読まれたりするんですか？」
「そこそこよ。最近だと『よくわかる転生入門』『マントルよりも深い愛』『黎明』なんかを読んだわね☆」
「どれも最近話題の作品じゃないですか！　ファンタジーに恋愛、文学まで網羅するとは、結構色々読まれるんですね？」
「流行に敏感なだけよ。あ、丁度いいからお茶いれてもらってもいいかしら♡」
「ええ、じゃあお借りしますね」
　玉座の一角にはキッチンが併設されている。このワンルームで完結する生活構造になっているのは、中々便利だと思った。お湯を沸かして、ぬいぐるみを愛でる二人にお茶を渡す。
「ローザ、あとでこの子持って帰ってもいいかしら？」

「いくらルシファルちゃんの頼みでも、うちの子は渡せないわ♡」
「むう」
頬を膨らませたルシファルは、クマのぬいぐるみをギューッと抱きしめた。
「おまたせしました、どうぞ」
「ありがと♡」
砂糖を入れて一口飲む。うん、文句なしの美味さ。間違いなく茶葉がいい。
「お口に合った？　紅茶好きだから、結構こだわってるの♡」
「いいですね、とても香り高くて好きです」
「紅茶好きとは気が合いそうだね！　俺も、作業の友によく嗜むものさ！　ローザ氏もそうなのかい？」
「――ええ、まあ」
微妙に間があった。何か気に食わないことでもあったのだろうか？
ローザはすぐに様子を戻して、「どうでもいいけど」と続ける。
「いくらお話しても、私の答えは変わらないわよ？　お婿くんにも説得の気はないみたいだし☆」
「いやいや、そんなことはないさ。友の話は有意義なものだったし、これからが本番だからね」
意味深な反応に私は首を傾げる。「それはどういう――」と聞く間に、光己はファンシーな玉座の片隅、ぬいぐるみの山の中の、不自然に体だけ突き出たウサギを引っこ抜く。すると部屋の中は大きく振動し始めた。
「え、ちょ、アンタ何やってんのよっ！」
飄々とした態度から一変、ローザが焦った様子で光己に詰め寄る。光己は笑って「いやあ、俺は《目》――と顔と声と頭と性格がよくてね。こういうことが分かっちゃうのさ」
と、無駄に冗長で不快な、答えになってない答えを返した。光己の瞳、通称拘束されぬ瞳（リベレートアイズ）の手にかかれば、魔力の流れや短期の未来予知程度余裕――らしい。多分多少盛っているが。

「さあ御開ちょグフッ!!」
「返しなさいよ!!」
　とはいえ本人の能力自体は至って普通なので、いざ戦闘となれば何の役にも立たない。脇腹を殴られ、ウサギをひったくられる光己。慌てて元の場所に戻そうとするローザだが、その腕の中にあるのは、いつの間にかクマのぬいぐるみに変わっていた。
「ハアッ!?」
「ごめんなさいねローザ、この子がかわいかったのが悪いの」
　ちろりと舌を出すルシファル。胸元からウサギの耳が飛び出ている。呆気にとられる間に部屋の振動は終わっていて、二つに割れた絵画の後ろに隠し部屋が開かれていた。その先にあったのは――

正体判明の一分前

「見ないでええええ!!　っていうか進まないでえええええ！」
　ローザの懇願も空しく、無慈悲に我々は進む。その先にあったのは白を基調としたシンプルな部屋。一つ特徴をあげるならその広さと、保護ケースに入れられ、壁一面に並んだ無数のフィギュア類。ロボット、美少女、美少年、マスコットキャラなどその種類は多種多様。
「す……すごい！　こんなにたくさんグッズがあるなんて！　ローザさん、アニメとかお好きなんですね！」
「ふ、ふん。少しくらいはね」
「いやいや、照れなくていいですよ。この並びを見ればわかります、作品一つ一つへの深い愛が。そうじゃなきゃこんなに綺麗な形にはならないし、ジャンルもここまでバラけない」
「ッッッッッッ……！」
　なぜだかとても悔しそうなローザは、「そうよ！　悪い!?　私みたいなのがサブカルが好きで!!」と怒り始めた。全然悪くない、むしろとてもいい。周りに趣味の合う人がいなかったので、ようやく得た同好の士である。なんなら好きな本について、小一時間語り合いたい。
　部屋の中心に目を向けると、至ってシックな木造の机と、何冊かの本が置かれている。よく見ればそれは『フォーリナー・クロニクル』――先日読了した、大好きな小説であった。
「ローザさんも『フォクロ』お好きなんですか!?」
「え!?　ええまあ――好きね」
「いいですよね、フォクロ！　私この作者さんが好きで、デビュー作の頃からずっと追いかけてるんです。緻密な世界観と、濃いキャラクターたちがめちゃくちゃ好きで」
　私の言葉に、ローザも嬉しそうに頷いた。
「いいわよねフォクロ、私は『ダダダ』の方が好きだけど」
「わかります！　他の作品に比べて人気ないですけど、『ダンジョン・ダイス・ダンス』もその独創的な設定がとても面白くて、いいですよ

ね！」
「よくそんなマイナーな作品まで読んでるわね！」
「まあ――ファンなので」
　なんだか照れ臭くて、ポリポリと頭を掻く。
「それに、ローザさんだってお好きなんでしょう？」
「まあ……それはそうなんだけど」
　恥ずかしいのか、ローザは目を剃らした。その視線の先、ダークブラウンの机の上に、雑多に置かれた本に見覚えがあった。手に取ると、その表紙には『フォーリナー・クロニクル』の文字とキャラクターのイラスト。間違いない、この前読んだ最新刊だった。
「今回もよかったですよね、まさかヒロインにあんな秘密が隠されていたとは……親友の裏切りもあるし、次巻がどうなるのか楽しみで仕方ないです！　でも作者さんの事情で休刊って噂があるみたいで、心配なのはもちろんですけど残念ですよね……」
「そ、そうね。残念よね……」
　涙を滲ませるローザの姿に、やはりファン同士、悲しい想いは共有できるんだなと小さな感動があった。
「え？　そんなことはないんじゃないかな」
　――が、それを壊すように光己が割り込んでくる。
「なんでだよ。病気じゃなくて、多忙だったから休みたいだけってことか？」
「おお、流石だ友よ。そういうことだ」
　そのまま光己は、ローザを見遣る。
「そうだよな、作家先生！」
「え」
「ハ、ハァ!?　あんた何言ってんの!?」
　ローザの動揺を余所に、光己は机へと足を進める。そして本の山の隙間から、少しくたびれた原稿用紙の山を引っ張り出した。
「えーと……ほう、ヒロインの秘密というのは主人公と腹違いの兄弟であるということだったのか！　禁断の愛だな！」
「いやあああああああ!!!!!」

「ぎゃあああああああ!!!!」
ネタバレを喰らったファンの悲鳴が狭い室内に響き渡る。というか、それはつまり……？
「え、ローザさんがあの真旅　千代先生だったってことですか!?」
「ッ、そうよ!!　悪い!?!?!?」
本日何度目かの『悪い!?』である。ぜんぜん悪くない、っていうか最高にいい。
「ファンです、サインください！」
「そのくらいお安いご用よ!!」
丁度持っていた『フォクロ』最新刊を渡すと、手慣れた様子で帯に流麗な字が刻まれた。小さな感動がある。
「すごくうれしいです、ありがとうございます」
「こちらこそ……読んでくれてありがとう」
目を逸らし、囁くようにローザは言った。うさぎのぬいぐるみを抱きしめたルシファルが「でも驚いたわ、ローザが小説を書いてたなんて。いつ頃から始めたの？」と興味深そうに聞く。
「百年ほど前かな、急に男遊びに飽きちゃって、ピロートークとかで聞いてた与太話を活かして作品にすることを思いついたの」
「合理的と言えばそうなんですけど、物凄い飛躍と転換ですね」
キャラの濃さと関係性の深さも、そう言われると合点がいく。経験の強さである。
「改めて聞くがローザ殿、採掘に協力いただけないでしょうか？」
「いくらいい雰囲気だろうと、その答えなら変わらずＮＯだけど」
「交換条件に一点、付け加えることがある」
指を立てた光己は、その勢いのままに私を指さす。行儀が悪い。
「了承してくれたなら、採掘の時間には我が友を貸しだそう！」
「え」
「は？」
首を傾げる私と、殺気を、漏らすルシファル。ローザは冷静に「それに何の意味があるの？」と問う。
「我が友は優秀だ、君のアシスタントから話し相手まで何でもこなす

だろう。何より――君の大ファンだ」
　ポケットから取り出した黄金の鍵を捻ると、魔宝庫が開き、光己はそこから一冊の雑誌を取り出す。
「これは真旅先生が、最近受けたインタビューが載っている雑誌だ。ここで先生は、『ファンの生の声をあまり聞ける機会がない』と嘆いている」
「まあ――身分上顔出しでサイン会とかできないし、ぜんぜんファンレターもらえないしね……」
「ところが、我が友を付ければその『生の声』がリアルタイムで聞けるし今後の展開への反応も見れる。一石二鳥だろう!?」
「ん……？　それ、アナタを介さずとも私が直接お婿くんにお願いすればよくない？」
「……友よ！　君からもお願いしてくれ！」
　ノープランかよ。悪友の詰めの甘さに苦笑する。
「まずアナタがこの人と、何より妻である私にお願いするべきじゃないかしら？」
　いつの間にか接近していたルシファルが、右腕に絡みつきながら光己を睨む。
「説得してくれ、頼む！　レアメタル多めに譲るから！　それとルシファル嬢には友の昔の写真あげるから！」
「……ちょっとくらいならいいわ」
「よし！」
　ルシファルの快諾に、光己が期待の眼差しでこちらを見つめる。
「いいよ、やるよ。好きな作家の手伝いができるってだけで、いい機会だしね」
「ありがとう友よ、恩に着る！　あとは……」
　ローザは、あからさまに溜息を吐いた。
「目の前で楽しそうに取引された上で、ルシファルちゃんまで乗っかったとなるともう、断れるはずないじゃない」
「ということは……」
「いいわよ、採掘。ただしめちゃくちゃ静かにね！　あと一割は私に

も寄越しなさいよ！」

話がまとまったことで一息つく。淹れたお茶は、とっくにぬるくなっていた。

取引と視察の三分前

「婿くん～まだ～!?」
「お、おまたせしました！」
　焦って運んだため、中身を零しかけてドキドキしながら、ティーカップを原稿で溢れかえった机上の端にそっと置いた。ローザはそれまでの指の動きが嘘のように、静かにそっとカップの持ち手を掴み、優雅に一口飲んだ。
「ふー……美味しい♡」
「恐悦至極です」
　牙を剥き出して微笑む彼女は、「同じ茶葉でも人が淹れてくれるとどうしてこうも美味しいのかしら～？♡」と機嫌良さそうに言った。たぶん、尽くされている優越感だと思う。
「ロイヤルミルクティー、自分で作るとめんどくさいのよね～。そういうとこもあるのかも。助かるわ♡」
「いえいえ、このくらいしかできないので」
　先日の約束の対価として、現在私はローザのお手伝いをしている。初めはのんびりお茶を淹れたりお喋りしたりという程度だったのだが、最近はどうも締切間際で忙しいらしく、少し修羅場というか、先程のように不機嫌なシーンが垣間見える。
「ふー……こうして一服させてもらえるだけでも違うわね♪　本当はこの後一発ヤレるともっといいんだけど……はあ」
「いや、そんな悲しそうに嘆息されましても」
「冗談よ。いくら私でも、ルシファルちゃんのモノに手を出したりはしないわ。それに――」
　ジロジロと、ローザは訝しげにこちらを見た。
「あんた、私に微塵も欲情してないでしょう？」
「……いえ、魅力的だと思いますよ」
「おべっかとかはいいの。っていうか私を誰だと思ってんの、そのくらいはすぐにわかるわ」
　この分じゃルシファルちゃんも苦労してるわね――とローザは深

く溜息を吐いた。
「まあ、あの子は男女のアレコレを何も知らないだろうから、そういう意味ではむしろ気楽なのかしら」
「ローザさんが言うとひと味違って聞こえますね」
「ええ、まあ。知り尽くしてるからね」
　立ち上がったローザは、指揮棒でも操るように指で宙をなぞる。すると件の隠し部屋が開き、そこからパラパラと無数の紙が現れ、私の目の前で束になった。
「これ、今までの男の武勇伝と珍事リストね。丁度いい機会だから、この中から面白いと思ったものだけ厳選して纏めといて」
「私は別に構わないんですけど……いいんですか？」
「いいのよ、一度や二度寝た程度の男、ネタ程度の価値しかないわ。……ダジャレじゃないからね!?」
「いや、何も言ってませんけど」
　それだけ言うとローザは再び原稿に向かったので、私も目の前の束を読み始める。いや、濃い。要人の割合が多いだけあって、これ書いちゃ不味いだろっていう裏エピソードとか、大人の事情だとかが続々出てくる。めちゃくちゃ面白いが多分、放送コードとかに引っかかる。
　そういう意味ではむしろ、名もない貧民出の青年の話だとかがロマンチックでよかった。かの四地王が身体を許しただけあって、夢は大きく、世が世なら歴史に名を残していただろう逸材がゴロゴロいる。或いは、この人に吸い尽くされたせいでそれが潰えたのかもしれないが……
「ある程度読みましたよ」
「どーだった？♡」
「めっちゃ面白かったんですけど、今のペンネームでやってほしくないです。別名義でこれまとめた小説出したら絶対売れますよ」
「えー、それはちょっとメンドクサイな☆」
「でもそれされると既存のファン離れちゃうかもですよ、ラノベ読む

層がいくらムッツリといえどガチエロは引かれる傾向にあるので」
「ちなみにお婿くんはどーなの？」
「私は普通に読みますよ、そんなウブでもありませんから」
ふーーーーーん、とやけに伸ばした口調で、ローザはこちらを覗き込む。身体の動きに合わせて、豊かなバストが跳ねた。

「それに、最初から同名義でやるよりも、後から同一人物だったって判明する方が熱いじゃないですか？」
「……それはちょっとおもしろいカモ」
「でしょう？」
胸の前で腕を組んで、ローザは少し悩んでいる様子だったが、すぐに頷いて「うん、それがいいわね！　お婿くん、早速アイツ呼んでアイツ!!」と私を顎で使おうとする。
「あの、アイツとは？」
「アナタの友達よ！　あのムカつく男!!」
ああ、光己のことか。頷いて、電子端末で連絡を取る。スリーコールのあと、すぐに繋がった。
『やあ我が友！　君の親友、高貴な光己だよ!!』
「相変わらずやかましいわね♡」
『やあ、その声はローザ嬢か。君からの連絡なのかい？』
「ええ、まあ癪だけど所用があってね」
『なら丁度いい、俺も一度そちらに伺いたかったからな！　今行くっ！』
電話が切れると同時に、部屋の恥に設置されていた魔導陣に光が灯った。円柱型の光の中から、左肩に手を添え、天を仰ぐようにした謎のポージングの男が姿を表した。
「やあみんな！　高貴なる光己、ただいま推参！」
「帰れ、早急に」
「ええ!?　呼んでおいて酷い!?」
どちらかといえば、電話で済むのに勝手にでしゃばってきたコイツが悪い気がするが、それについては面倒くさいので触れない。ローザ

も呆れたように嘆息している。

「やあローザ嬢！　本日も麗しいね！」

「当然でしょ？　あんたは今日もうざいわね」

「お褒めに預かり恐悦至極！」

　微塵も褒めていない。しかし、光己はなんだか嬉しそうだった。或いはそれも、相手の毒気を抜く処世術なのかもしれない。……いや、コイツは絶対そんなこと考えていないが。

「して何用かな？」

「例の鉱脈の報酬の話、あったじゃない？　あれの利益なんだけど、私の取り分をなくすかわりに別のお願い聞いてほしいなーって♡」

「ふむ、いいだろう！」

「まだ何も言ってないだろ」

　快諾が過ぎる。光己は笑って、「この前の交渉では多少強引な手を使ってしまったからな。その分こちらが譲歩するのが筋ってものだろう！」と言った。

「それに俺の座右の銘はレディーファーストだからな！」

「ふーん、いい趣味してるじゃない」

　どこか楽しそうなローザが、本題を切り出した。

「お願いの内容なんだけど、アタシいまのと別名義で本出したいのよね」

「ほう、それはいいな！　だがそれなら、今契約している出版社に頼んだほうがいいんじゃないか？」

　私もそれは少し思っていた。編集などにかけあえば、ローザほどの作家（あと社会的地位）なら普通にやらせてもらえそうだが、何故わざわざ光己にかけあうのか。

「ほら、さっきの読んだらわかるでしょ？　アタシの話、歴史的にまずいものがゴロゴロ転がってるのよね、だから出版社がチキっちゃう危

険があるのよね」
「そういえばそうですね」
「でもその点、光己くんのとこなら安心じゃない？　♡」
十文字家が王族だとか権威だとかを嫌いがちなのは有名な話である。故に、傘下企業の出版社から出ている本も、強気なものが多い。確かにそれなら、ローザのノンフィクションも創作として受け入れられるのかもしれない。
「なるほど！　そういうことなら、喜んで力になろう！　表現の自由は守られるべきだしね☆」
「助かるわ。じゃあ詳しい手続きはまたあとで――で、アンタの方の用事は？」
「ああ。本格的な採掘の前に、ある程度現地視察しなきゃいけないから、その許可を貰いにきたのさ」
「おっけー、そういうことなら案内するわ。こっちよ♡」

見物と依頼の四分前

「大体この辺かしら？」
「おお、ここが……！」
　光己が感嘆の声を上げた。ロサーズキャッスルと城下町から数キロ、目の前に広がるのは古戦場だった。折れた槍、刺さったままの弓矢、点在するクレーターなど、未だ戦の傷跡が風化せずに残っている。
「たしかに、至る所に魔力の残滓が見えるね」
　光己の『拘束されぬ瞳（リベレートアイズ）』が光る。そのまま比較的大きなクレーターへと向かって歩けば、中に細かい魔石が散乱していた。
「こんなのがゴロゴロ転がってるのか……」
「うむ、実に期待できるね！　早速Ａランクの魔石が見つかるとは！」
　光己が石を手に取りながら言った。魔石と言ってもピンからキリで、最低のＥから最高位のＳＳまであり、大きさ・質・不純物の割合などでランクが定められている。Ａといえば相当な価値があり、平民が買う給料三ヶ月分の指輪が大体このランク帯だ。手元の石だと、大きさ的には十数人分くらいになるだろうか。
「概ねこの辺りを採掘地にすればよさそうだな。ありがとうローザ嬢！」
「ホントに静かにやってよね？　どうせこんなところ、あんまり来ないからいいけど」
「徹頭徹尾気をつける！　何だったら君の城に防音魔法を張っても――」
「ああ、いいいい。そーゆーのすらいらないから。創作と鑑賞の邪魔さえなきゃなんでもいいの♡」
「ほう！　鑑賞への干渉はやめてくれ、と！」
「上手いこと言ったみたいな面しないでくれる？」
　漫才じみたやりとりをしている二人に苦笑しながら、周囲を散策する。
「あっ」

「どうしたんだい、友よ？」
「いや、そこに落ちてるのって――」
「うん、どう見ても骨ね」
　人の、とローザが付け加える。土を被って所々罅割れたそれを見ても、これが人の果てだとは思えなかった。

「古戦場だし、珍しい物でもないでしょう」
「まあそれはそうなんですけど、なんとなく気になって」
　ここまで状態が悪いと、ルーティの能力で動かすこともままならないのだろうなとぼんやり思う。
「ちゃんとした死体見たのって、初めてかもしれないです」
「ルシファルちゃんの傍にいたらそんなの無限に見てそうな気がしたけど――そっか、あんたが来たのはあの子が丸くなってからだっけ？」
「そうですね。それに彼女――綺麗好きじゃないですか」
「ああ――そうね♡」
　魔王の癇癪に触れた者は、死体すら残らない――そういうことだ。親族もおらず葬式の機会なんてなかったから、『死』というものへの実感が希薄だった。そんなもの、骨だけ見ても何も得られないが。
「目の前で人が跡形もなく消し飛ぶのって、死への実感も何もないですからね――元からそんな人いなかったんじゃないか、って目を疑うばかりですよ」
「ふうん……？　♡」
「なんですか、その意味深な瞳は」
「いやー、色々あったのね♡」
「ああ、彼は深い深い人間だからね！」
「変なフォローをするな」
　言いつつも、光己は遺骨に触った。おいそんな不謹慎な――と止める間もなく、奴は骨の隙間から赤い何かを取り出した。
「ほら――深いからこそ、何でもなさそうな無縁仏から、ＳＳランクの魔石を見出す！」

「なっ!?」
「えっ!?」
　先程の物よりずっと紅く、朱い魔石。無縁仏から取り出されたそれが、陽を受けてギラギラと輝く。
「いやあ、流石の俺も久々にお目にかかるね、こんなに純度の高い魔石は！」
「え、マジじゃんすごー♡」
　多少は驚いている様子だったが、二人ともそこまでテンションが上がっているようには見えない。五本の指に入る財閥の御曹司と、伝説の四地王の一人であれば当然か。
「たぶん相当な兵だったのだろうな、この無縁仏は！」
「お婿くん何やってんの？」
「いや、魔石貰っちゃったしせめて骨を埋めさせてもらおうと思って」
　丁度いいサイズのクレーターに骨を集めて、土を被せる。大した埋葬もできなくて申し訳ないが、せめてもの礼儀である。
「そうだな――古戦場を採掘現場にする訳だし、その道のプロに一度鎮魂を頼むべきかもしれないな！」
「あー、そういうの怠ってアンデッド系のモンスターに襲われたって話もあるもんね？」
「となるともしかして――」
「ああ――友よ！　四地王の一人、ルーティ嬢にお願いできないだろうか!?」
「いや無理無理無理。私、あの子にめっちゃ嫌われてるから。一応最近和解はしたけど、物を頼めるような関係じゃないよ」
「でもあたしから頼んでも断られるわよ？　ミーティちゃんに避けられてるもん」
「ああ……」
　何となくそんな気はしていた。ローザ自身は何も思ってないだろうが、明らかにルーティは苦手そうなタイプだものな。
「お祓いなんて誰がやっても同じでしょ、お抱えの聖歌隊とかにやってもらったら♡？」

「それもそうか！」
「納得するな」
　気持ちが大事というし、鎮魂を試みるだけマシなのかもしれないが
――まあいいか。
「そういえば我が友よ、君に渡す謝礼の内容を決めていなかったね。何か欲しい物はあるかい？」
　金でも物でも俺に渡せる物なら何でも渡そう、と光己は景気のいいことを言った。
「はーっ、婿くんはこれでも魔王の夫なのよ？　そんな彼が満足いくものをあんたはあげられるのかしら？」
「正直厳しいだろうね！　だが言うだけならタダだ、当然無理なものは無理と突っぱねるが、出来る限り検討しよう！」
　ため息混じりのローザに光己は笑顔で返した。
　欲しい物――そうだな、ここが魔石の採掘場ということを踏まえても丁度いいかもしれない。
「――――と、――――をお願いしたい」
「ああ、そのくらいお易い御用だとも！」
「ふーん、そういえばまだだったのね」
　ローザも光己も、どこか嬉しそうに見えた。「その時が来たら、二人とも呼びますね」と微笑みだけ返して、品物の完成を心待ちにするのだった。

休息の三分前

「今日はいい天気ね」
「そうですね……そうですか？」
　朝食後。ソファに座って珈琲を飲むだけの、久々に訪れた、特に予定のないまったりとした時間。彼女の呟きに、私は反射的に頷いた。が、よくよく窓の外を見たら全然雨だった。
「いい天気よ。だって、雨なら貴方はどこにも行かないでしょう？」
　無邪気な笑顔で彼女は言った。……いや、たしかにその通りなのだけれど。
「ルシファル、もしかして最近私が家を空けがちだったから拗ねてます？」
「そんなことはないわ。子供じゃあるまいし」
　子供の物言いだった。ここ数週間くらいはローザのアシスタントや光己とのミーティング、その他諸々用事が多く、あまりルシファルと顔を合わせていなかった。とはいえ彼女の方もずっと疎かにしていた魔王としての執務が溜まっていたので、丁度いい機会だしと言い包めて働かせていたのである。
「すみません、寂しい思いをさせてしまって」
「本当にね。日々、一日千秋の思いでしたわ」
　よよよ、と彼女は泣き真似をして見せた。だが私は知っている、彼女が毎日部屋で本当に啜り泣いていた上に、その泣き声が大きくなるにつれて執務中の癇癪がひどくなり、周りに当たり散らかしていたことを。グレラくんが泣きそうな顔で愚痴っていた。
「もし今日もダメだったら、秋を越えて冷たい冬まで達するところだったわ……」
「八つ当たりで魔法使ったりするのは絶対やめてくださいね」
　本当に死人が出る。私が家を空けたせいで尊い犠牲が生まれてしまったら、寝覚めが悪いどころの騒ぎではない。
「冗談よ。私にもそのくらいの分別はつきますわ」
　限りなく怪しいので、「ローザさんの締切も一段落したみたいです

し、光己にも話して二日くらいお休みを貰いますよ」と言っておく。恐らく、そろそろガス抜きしておいた方がいい。何なら今日も本当は古戦場採掘の監督の予定だったのだが、雨の予報だったので中止になったのだ。
「そうね……はっ！　それはつまり、雨が止まなければ永遠にお休みなのでは……？」
「やめてくださいね、大魔法で古戦場水没させたりするのは
彼女にはそれができるだけの力と思い切りがある。思い切りというか、後先考えてないだけかもしれないけど。
――きっと、いまの彼女が必要としているのは一つしかないのだ。
「……連休になりそうですし、どこか出かけます？」
「いいわね♪」
当然乗り気なルシファル。とはいえ、明日も予報自体は雨だし、そうなると場所が――

「あ、そうだ」
閉まっておいた封筒から、二枚のチケットを取り出す。それはかつて晩餐会に顔を出す際にジンから貰っていた、プラネタリウムのチケット。これなら季節など関係なく楽しめる。
「明日行きましょうか。色々準備も要りますし」
「そうね」
微笑んだルシファルが、ぼすんと間抜けな音を響かせながら、こちらにしなだれる。長くふわふわとした髪と、ゆったりとした白いニットの感触が肩に伝わる。
「今日のところは、ゆっくり過ごしたいし……ね？」
「……そうですね」
まあ、たまには甘えさせてあげよう。猫のように擦り寄る彼女に苦笑しながら、ゆっくりと瞬きをした。

鑑賞と感傷の三十一分前

「いつも悪いね、グレラくん」
「いえいえ！　とんでもないっす！」
　黒の魔車の前でグレラが小さく敬礼した。その姿に小さく苦笑したが、背後の魔王の若干不機嫌そうなオーラに気づき、そそくさと運転席に向かった。私達も後部座席に乗り込む。
「……ルシファル、少し近くないですか？」
「あら、そうかしら？」
　大人三人ずつが対面できそうな程広い車内であるというのに、彼女は私の腕にまとわりついている。
「もしかして、こうするのは嫌……？」
「いえ。これだとルシファルの顔が見づらくて少し残念だな、と」
「これならどうでしょう！」
　あざとい上目遣いから一転、正面に迷い込んだルシファルが胸を張って自信たっぷりに微笑んだ。ので、「素敵ですよ」と褒めておく。こういう扱いやすい所は、嫌いではない。

「着きましたっす！」
　なんだかんだと談笑しているうちに、目的地に着いたらしい。座席から降りて、グレラにチップを渡して、帰る際に呼ぶのでそれまでは自由にしていていい旨を伝える。
「なんかデジャブっすね！」
　二度あることは三度あるというし、たぶんデートの度にお世話になると思う。それを理解してか、ビシッと敬礼のポーズをして「今後もおまかせください！」と笑った彼が去っていった。
「さて、私たちも行きましょうか♪」
　手を繋いで目の前の商業施設に歩き出す。既に認識の魔法は使用しているため、目立つ魔車はその辺のタクシーに誤認されているはずだし、私たちも適当なカップルに見えているはずだ。

「ふふっ、帰りに何か買い物をしていくのもいいわね」
「たしかアクセサリーとかが充実してるそうですよ」
イヤリングやネックレスなどを贈ってもいいかもしれない、と思ったが、流石に王族に見合うような立派なモノはないはずなので、ウィンドウショッピングになるかもしれない。まあ恐らく、私が贈ったものであればなんでも喜んで着けてしまう彼女なので、そんなに気にすることもないのかもしれないが……
エレベーターで上階に向かう。チケットを見せて、プラネタリウムの中に入る。平日の昼間だけあって、客足はまばらでほとんど貸切状態だった。
「この席フカフカね」
「ですね。雲に寝転んでるみたいな心地になります」
ジンが少しだけいいシートを選んでくれたようで、ちょうど二人が寝ころべるサイズのそれは、柔らかな感触に身体が沈み込んでいく感覚があって、ここに寝られるだけで来た価値があるといっても過言ではなかった。ルシファルと二人、顔を見合わせて小さく微笑む。
そうしているうちに徐々に照明が落ちていき、開幕のブザー音が鳴る。耳触りのいいナレーションと共に、天体ショーが始まった。
『――古来より、我々は星空に数多の星座を見出してきました』
星々が点と点で繋がり、線となり、様々な模様を描き出す。獅子、水瓶、天秤、乙女。
『宇宙、そして天体は魔法にとっても大きく意味のある存在で、切っても切れない関係にあります』
魔獣、飛竜、天使、悪魔。
ボーッと繋がれる星々を眺め、ナレーションに耳を澄ませていれば、自然と眠気が湧いてきて。いやいや眠っちゃダメだ、と目を擦れば、隣から寝息が聞こえてきた。その安らかな寝顔に小さく苦笑を漏らせば、「……寝てないわよ?」なんて、頬を膨らませた彼女が言った。
「私はちょうど、寝ちゃいそうなところでした」
「ふふ」
こてん、とこちらの方に顔を向けて横になるルシファル。星に見向

きもしないその様子に、いつかの水族館の記憶が重なる。
「ルシファル、好きな星座とかあるんでしたっけ？」
「そうねえ、貴方の誕生星座かしら？」
　星々に微塵も興味がないことだけはよくわかる返答だった。
「ふざけてるわけじゃないの。ほら、私って魔王じゃない？」
　それはそうなんだけど、口語でなかなか聞かない響きだ。
「天を地に貶めるからこその魔王と四地王。つまり、星は見る物じゃなくて堕とす物で、堕ちてくる物を見上げる必要なんてないから、区別する必要すらないのよ」
　精々大きいか小さいかだけの差ね――と彼女は続けた。そりゃそうだ、武器として堕とすんだから。
「……すごかったですもんね、あなたの星堕（メテオ）は」
「あら、照れますわ」
　暗いせいでよく見えなかったが、彼女が頬を赤らめているだろうことは容易に想像がついた。
　知らぬ間に星座の解説は終わり、ナレーションは惑星の話に移っている。
「アレは流石に落とせないわね」
「たぶん、天体ってそこを基準に考える物じゃないと思いますよ」
　いつの間にかルシファルもプラネタリウムを眺めていた。まあ私に釘付けよりは遥かにいいので、何も言わない。
『――人々は昔から、流星に願いを込めてきました』
　遠くの空で、点が線となって走る。それを皮切りに無数の星が流れ、群れを成す。これだけあれば、願いを三回言うのなんて余裕だろう。
「貴方にいま、何か願いはあるのかしら？」
「ありますよ。とびっきり、叶えるのが難しいのが」
「言ってくれれば、私も手伝うのに」
「いえ、こればかりは――自分でやらなきゃ、意味がないので」
　流星を見つめて、拳を握った。今更祈るまでもない、願うだけの時間は終わったのだから。

「……綺麗ね」
「ええ、本当に」
いつの間にかルシファルの視線は、天幕に釘付けになっていた。その赤い瞳に線が映る。立場がいつの間にか逆転している。
『散って流れる、星々の最後の瞬き。それ故に流星は美しいのです』
「……」
一番いいところだと言うのに、結局ルシファルは瞳を閉じてしまった。まあ、その方がらしいなと苦笑して、その流麗な銀髪を撫でる。
「起きてる時なら絶対にやらないな」
彼女が気持ちよさそうに身じろぐ。いつかは終わるとしても――でも、この一瞬くらいは、温かな微睡みに身を委ねてやろうと。そう思った。